研究報告書第50号

F8－01

学校生活における児童生徒の社会性の育成に関する研究

――協力しながら自治的に活動することができる態度の育成を中心として――

1989. 3

山形県教育センター

（資料整理カードF８－０１）

研究報告書第 50 号（平成元年３月刊）

学校生活における児童生徒の社会性の育成に関する研究

――協力しながら自治的に活動することができる態度の育成を中心として――

山形県教育センター

目　　次

Ⅰ　研究の趣旨
1.　研究のねらい
2.　研究の趣旨

Ⅱ　研究の進め方
1.　第１年次について
2.　第２年次について

Ⅲ　研究の内容
1.　社会性についての基本的な考え方
2.　調査結果からの分析と考察
(1)　児童生徒・教師を対象とした実態調査の概要
①　児童生徒の社会性についての実態調査
②　社会性の育成を図る指導の実態調査
(2)　社会性の到達度からみての分析と考察
①　社会性の到達度の学年別，領域別の比較検討
②　社会性の各領域間の関連性
3.　「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成についての基本的視点
(1)　特別活動の活性化を通しての育成
(2)　小さな集団及び縦割り集団における活動を通しての育成
4.　「協力しながら自治的に活動することができる態度」を育成する具体的な方策
(1)　小さな集団の活動を通しての育成
①　学級会活動
②　学級の班活動
(2)　縦割り集団の活動を通しての育成
①　清掃活動
②　業間あそび等異年令集団活動
③　生徒会活動

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題
1.　研究のまとめ
2.　今後の課題

研　究　の　概　要

1　研究の趣旨

最近，児童生徒の中に，集団の活動に参加し人とまじわっていくことがうまくいかなかったり，人と協力しながら自発的，自治的に活動することができなかったり，あるいは，自己を統制することができなかったりするような傾向が見受けられることから，児童生徒の社会性の育成が重要であると強調されてきている。社会性の育成は家庭でも地域でも進めていく必要があるが，そこでの育成が少なくなってきているいま，学校教育の場で意図的に進めていかなければならない課題になっている。

そこで，小・中学校における児童生徒の社会性の実態と学校における指導の実態とを調査し，児童生徒の社会性の育成についての指導上の問題点を明らかにし，その改善のための方策をさぐることとした。

2　研究の進め方

第1年次には，社会性についての考え方をまとめ，学校生活における児童生徒の社会性の実態及び児童生徒の社会性の育成を図る指導の実態を把握するため，児童生徒用及び教師用の質問紙法による調査票を作成し，調査を行う。調査回答を集計し，分析して，指導上の問題点をとらえる。

第2年次には，社会性の到達度からみての集計，分析を行い，また，すぐれた実践をしている学校の聴き取り調査を行う。これらのことから，学校生活における児童生徒の社会性の育成を図る指導の進め方についてまとめ，今後の課題をとらえる。

3　研究の内容

(1)　小・中学校生活における児童生徒の社会性の実態及び指導の実態についての調査結果の概要をまとめた。

(2)　児童生徒の社会性の実態調査の結果を到達度の観点からとらえ直し，分析と考察を行った。

①　社会性の到達度の学年別，領域別の比較検討

②　社会性の各領域間の関連性

(3)　学校生活における児童生徒の社会性の育成を図る方策を探った。

①　児童生徒の実態等から小さな集団，縦割り集団を通しての育成という視点から探った。

②　社会性の到達度からの分析に基づいて，社会性の領域のうち，「協力しながら自治的に活動することができる態度」に焦点化して探った。

4　今後の課題

(1)　児童生徒の社会性の育成を図っていくために，社会性の3つの領域の関連性をさらに分析してとらえ，その上にたって学年に応じた具体的な指導の方法を明らかにしていく必要がある。

(2)　児童生徒の中に「交わることができる態度」の未熟であると思われるものが見受けられる。このような児童生徒の実態や問題に応じたきめ細かい指導の方法を明らかにしていく必要がある。

は　し　が　き

児童生徒が有意義で充実した生活を送り，かつまた，今後の社会生活の中で自己をより良く実現していくためには，彼らの生活の場である家庭・学校・地域社会がそれぞれの教育機能を発揮し，児童生徒に豊かな生活体験や実践活動をもたせながら社会性の育成を図っていくことが必要である。

しかし，近年，社会の変化に伴う生活環境の影響もあってか，それぞれの時期の発達課題を達成するために必要な生活体験や実践活動が不足してきていることが，各種答申等でも指摘されている。

児童生徒に多くの生活体験や実践活動の場や機会を準備できるように，家庭でも地域社会でもその教育機能を充実し，児童生徒の社会性の育成を図ることが大切であることは言うまでもない。しかし，さしあたってここでは，学校教育において生活体験，実践活動の場や機会を生かしながら，児童生徒の社会性の育成を意図的に図っていくことが必要であると考えた。

そこで，当教育センターでは，小・中学校を対象として児童生徒の社会性の実態及び学校における指導の実態を把握するとともに，児童生徒の社会性を育成するための方策を得るために調査研究を行ってきた。

本書は，2か年の成果をまとめたものである。いろいろな角度からご検討いただくとともに，これからの教育実践の資料としてご活用いただければ幸いである。

最後に，この研究を進めるにあたり，ご協力をいただいた学校，並びにご協力いただいた方々に心から感謝の意を表したい。

平成元年 3月

山形県教育センター所長　曽　根　伸　良

目　　次

Ⅰ　研究の趣旨 …… 1
1.　研究のねらい …… 1
2.　研究の趣旨 …… 1

Ⅱ　研究の進め方 …… 1
1.　第１年次について …… 1
2.　第２年次について …… 2

Ⅲ　研究の内容 …… 3
1.　社会性についての基本的な考え方 …… 3
2.　調査結果からの分析と考察 …… 4
(1)　児童生徒・教師を対象とした実態調査の概要 …… 4
①　児童生徒の社会性についての実態調査 …… 4
②　社会性の育成を図る指導の実態調査 …… 8
(2)　社会性の到達度からみての分析と考察 …… 10
①　社会性の到達度の学年別，領域別の比較検討 …… 10
②　社会性の各領域間の関連性 …… 16
3.　「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成についての基本的視点 …… 23
(1)　特別活動の活性化を通しての育成 …… 23
(2)　小さな集団及び縦割り集団における活動を通しての育成 …… 24
4.　「協力しながら自治的に活動することができる態度」を育成する具体的な方策 …… 26
(1)　小さな集団の活動を通しての育成 …… 26
①　学級会活動 …… 26
②　学級の班活動 …… 30
(2)　縦割り集団の活動を通しての育成 …… 34
①　清掃活動 …… 34
②　業間あそび等異年令集団活動 …… 36
③　生徒会活動 …… 39

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題 …… 42
1.　研究のまとめ …… 42
2.　今後の課題 …… 42

研究担当者

指導主事	永田克彦
指導主事	佐竹清一
指導主事	遠藤正男
指導主事	佐藤時男
指導主事	黒沼利昭（62年度）
指導主事	梅本英夫（62年度）
指導主事	鈴木強太（62年度）

Ⅰ 研究の趣旨

1 研究のねらい

小・中学校における児童生徒の社会性の実態と学校における指導の実態を調査し，児童生徒の社会性の育成についての指導上の問題点を明らかにし，その改善のための方策を探る。

2 研究の趣旨

学校生活の中で，人とのコミュニケーションがうまくいかなかったり，人と共に活動することができなかったり，あるいは，きまりを守ることや人のために役立っていくことに無関心であったりするような児童生徒が，少なからず見受けられる。このようなことの背景には，子どもが自分自身で体験することを妨げられてしまったり，異年齢集団等の中での仕事や遊びの経験が少なかったりするなど，様々な要因が考えられるが，社会性が十分身についていない児童生徒は，学校生活においても将来の社会生活においても，自己をより良く実現していくことができないと考えられる。

社会性とは，人を認め，交わっていくことができる態度，人と協力しながら自治的に活動することができる態度，自己を統制することができる態度であると考える。児童生徒の社会性の育成は，家庭においても，地域社会においても，学校においても進めていくことが必要であるが，家庭や地域での育成が少なくなってきているいま，児童生徒の社会性の育成は，学校教育の場で意図的に進めていかなければならない課題となってきている。従って，学校生活の中で，児童生徒一人一人がより良く自己を生かし，充実した活動を行っていくことができるように，児童生徒の社会性の育成を図っていくことが望まれる。

そこで，小・中学校における児童生徒の社会性の実態と学校における指導の実態を調査し，児童生徒の社会性の育成についての指導上の問題点を明らかにし，その改善のための方策を探ることとした。

Ⅱ 研究の進め方

1 第1年次の研究の手順と調査の方法について

(1) 研究の手順

① 社会性についての基本的な考え方を整理し，学校生活における児童生徒の社会性の実態及び児童生徒の社会性の育成を図る指導の実態を調査するため，児童生徒用及び教師用の質問紙法による調査票を作成する。

② 調査の対象者を選定し，調査票を送付して調査を実施し，調査票を回収して集計する。

③ 児童生徒の社会性の実態及び指導の実態を分析し，それに基づいて児童生徒の社会性の育成についての指導上の問題点を明らかにする。

(2) 調査の方法

① 調査の項目

〔児童生徒について〕

ア 学校生活の満足度と人間関係
イ 学級会活動と行事
ウ 清掃
エ 教科の授業
オ 休み時間
カ クラブ活動・部活動

〔教師について〕

ア 児童生徒の社会性についての教師の理解
イ 児童生徒の社会性の育成に関する取り組み
ウ 児童生徒の社会性を育成するうえでの問題点
エ 児童生徒の社会性の育成についての教師間の要望
オ 児童生徒や教師の地域活動への参加

② 調査対象者の選定

調査の対象を県内の公立小学校の第4学年及び第6学年の児童と公立中学校の第2学年の生徒とした。また，教師については児童・生徒と同じ公立小・中学校の本務教員とした。各学年の児童生徒，小・中学校の本務教員を各々母集団として，必要な標本数を算出した。これに基づき，地域，学校規模を考慮して小学校から32校，中学校から26校を抽出した。抽出された小学校の第4学年及び第6学年の各学年の任意の1学級の児童全員，中学校の第2学年の任意の1学級の生徒全員とその小・中学校の本務教員全員を調査の対象とした。

③ 調査の方法と期間

調査票は抽出した小・中学校に直接送付し，調査対象者が無記名で記入したものを返送してもらうことにより回収した。調査の期間は昭和63年1月18日～2月6日である。

④ 調査票の回収状況

	配布調査票数	回収調査票数	回収率（%）
小学校4年	934	919	98.4
小学校6年	906	900	99.3
中学校2年	951	837	88.0
小学校教員	613	559	91.2
中学校教員	622	509	81.8

2 第2年次の研究の手順について

(1) 社会性の到達度からみての集計を行い，社会性の領域別，学年別の比較検討を行う。また，社会性の各領域間の関連性を検討する。これらのことから，児童生徒の社会性の育成を図る指導の観点を探り，指導の焦点化を図る。

(2) 児童生徒の社会性についての実態調査等の分析から，児童生徒の社会性の育成についての基本的な視点を定める。

(3) その視点等から，すぐれた実践をしている学校の聴き取り調査，事例の収集を行い，児童生徒の社会性の育成についての方策を探る。

(4) 児童生徒の社会性の育成を図る指導の進め方についてまとめ，今後の課題をとらえる。

Ⅲ 研究の内容

1 社会性についての基本的な考え方

児童生徒の社会性の育成を図っていくことが必要であると考える。それは，児童生徒の社会性の不十分さが児童生徒をとりまく様々な問題の要因の1つとみなされるからである。また，児童生徒それぞれが，現在の学校生活や今後の社会生活の中で，より良く自己を実現していくためにも，社会性が大切であると思われるからである。

さて，社会性をどのようにとらえていけばよいであろうか。小・中学校にかけて，児童生徒の生活基盤は家庭から学校，地域社会などへと広がり，そしてまた，児童生徒の所属し活動する集団も多様化してくる。そのような過程での様々な集団生活の中で，児童生徒は「それぞれが自己の特性を生かしながら，集団を構成する成員として，集団生活や社会生活を形成し円滑に進めていくことができるような能力や態度を身につけていく」ことを求められていると考える。

そこで，「集団生活や今後の社会生活を形成し円滑に進めていけるような能力や態度」を社会性ととらえていくこととした。

また，「集団生活や社会生活を形成し円滑に進めていけるような能力や態度」は以下のような3つの領域からなるものとしてとらえた。

(1) 交わることができる態度，すなわち，互いに他を認め合い，接したり，つき合ったりすることができる態度である。これは，児童生徒が所属する様々な集団での活動において，最も基盤となるものであると考えられる。

(2) 協力しながら自治的に活動することができる態度，すなわち．自分たちの願いや考えを実現するために，話し合ったり，計画したり，役割を決めたりしていこうとする態度である。また，自分たちの問題に気づき，みんなの力で解決しようとする態度や集団を自分たちの力で運営していこうとする態度である。

(3) 統制することができる態度，すなわち，集団における規律や規範を遵守することができる態度である。

なお，態度は個人の内的準備状態あるいは行動の傾向性であり，行動そのものではないが，それは「認知的要素，感情的要素，行動的要素の3つの要素からなるもの」とされる。そして，この態度が高まることによって，行動としてあらわれることにつながっていくと考えられる。

本研究では，社会性を以上のようにとらえたうえで，児童生徒の社会性の実態を把握し，社会性の育成について考えていくこととする。

2　調査結果からの分析と考察

（1）児童生徒・教師を対象とした実態調査の概要

①　児童生徒の社会性についての実態調査

学校生活の諸場面を通して，児童生徒（小学４年，小学６年，中学２年）の社会性，すなわち「交わることができる態度」「協力しながら自治的に活動することができる態度」「統制することができる態度」の実態について調査を行った。なお，教師が，児童生徒の社会性をどうみているか，その調査結果についても一部併せて載せておく。

ア　「交わることができる態度」について

●　級友に対する挨拶

小学生の８６％，中学生の７９％が，学級の人に「おはよう」「さようなら」などの挨拶を「いつも言っている」「ときどき言っている」としている。一方，小学校で７３％，中学校で６７％の教師は，児童生徒が日常の挨拶をすることができると「いつもそう思う」「ときどきそう思う」としている。教師の見方の方が厳しい傾向がある。

●　学級の中での友人関係

〔児童生徒〕

質問2
あなたは、日ごろ、学級の中でどのくらいの人とつきあっていますか。
1つ選んでください
1.　ほとんどみんなとつきあっている
2.　きまった人としかつきあっていない
3.　つきあっている人はほとんどいない

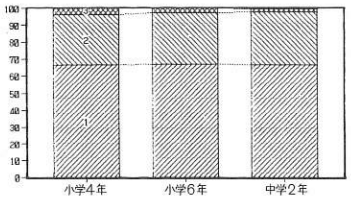
〔教　　師〕

質問2
あなたは、日ごろ、あなたの学校の児童生徒をみてどう思うことが多いですか。
(1)～(13)の項目について次の［　　］の中から１つ選んでください。

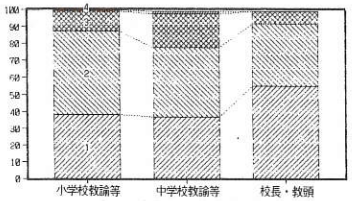
1.　いつもそう思う	2.　時々そう思う
3.　あまりそう思わない	4.　ほとんどそう思わない

(1)　ほとんどの児童生徒が、お互いに仲良く接することができる

図Ⅰ－１



図Ⅰ－２



小学生，中学生ともに６７％の児童生徒が「ほとんどみんなとつきあっている」としている。しかし，残りの児童生徒は「きまった人としかつきあっていない」「つきあっている人はほとんどいない」としている。一方，小学校では８８％，中学校では７８％の教師は，ほとんどの児童生徒がお互いに仲良く接することができると「いつもそう思う」「ときどきそう思う」としている。ごくわずかであるが，つきあいもせずひとりでいる児童生徒がみられることにも注目したい。

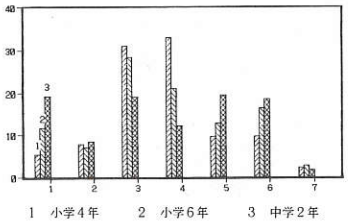
●　休み時間における交流関係

休み時間に「おおぜいの友だちと過ごしている」としているものは，小学校が５５％，中学生が５３％である。おおぜいの友だちと十分ふれあう機会をもつことは難しい点もあるかと思われるが，少人数で過ごす児童生徒が半数近くもおり交流の枠が狭い傾向にある。また，「ひとりで過ごしている」は，小学生で４％，中学生で５％とごく少ないが，本来楽しい交流の場である休み時間に仲間と一緒に過ごせない児童生徒がいることに留意する必要がある。

●　遊び仲間にはいれない人に対してはどうしているか

図Ⅰ－３

質問16
あなたは、遊びの仲間にはいれない人がいたとき、どのようにしていることが多いですか。１つ選んでください。
1.　人のことはあまり気にかけない
2.　ほかの人に言われたらさそう
3.　まわりの人と相談してからさそう
4.　自分からすすんでさそう
5.　さそいたい気持ちになるが、むりにさそわない
6.　きのどくだなあと思う
7.　その他（　　）



「自分からすすんでさそう」が小学４年では３３％，小学６年では２１％，中学２年では１２％であり，学年が進むにつれて少なくなっている。それとは逆に，「人のことはあまり気にかけない」は，小学４年では６％，小学６年では１２％，中学２年では１９％とと，学年が進むにつれて多くなっている。

イ　「協力しながら自治的に活動することができる態度」について

●　学級の係り活動

〔児童生徒〕

質問7
あなたは、日ごろ、学級の係活動（学級の仕事）をいっしょうけんめいにしていますか。１つ選んでください。
1.　とてもいっしょうけんめいにしている
2.　いっしょうけんめいにしている
3.　あまりいっしょうけんめいにしていない
4.　ほとんどしていない

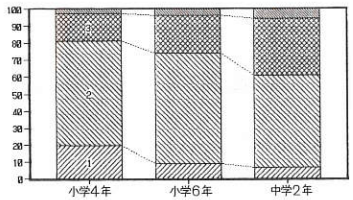
〔教　　師〕

質問2
あなたは、日ごろ、あなたの学校の児童生徒をみてどう思うことが多いですか。
(1)～(13)の項目について次の［　　］の中から１つ選んでください。

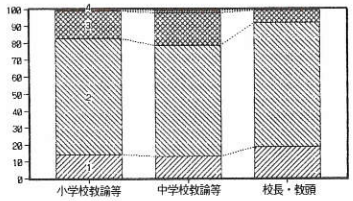
1.　いつもそう思う	2.　時々そう思う
3.　あまりそう思わない	4.　ほとんどそう思わない

(7)　学級などで決められた役割を果たすことができる

図Ⅰ－４



図Ⅰ－５

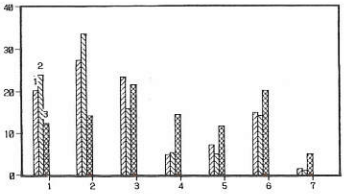


学級の係り活動を「いっしょうけんめいしている」とこたえている児童生徒は，小学４年で８１％，小学６年で７４％，中学２年で６１％である。学年が進むにつれて少なくなる傾向にあるが，小・中学生の大方は一生懸命しているようにみえる。一方，小学校で８３％，中学校では７８％の教師が決められた役割を果すことができると思っている。

● そうじに対する取り組みかた

図Ⅰ－６

質問10
あなたは、そうじのとき、どうしていることが多いですか。１つ選んでください。
1. きれいに、はやくできるように、すすんで班の人と相談し手わけしてそうじをしている
2. そうじをしていない人がいたら、さそっていっしょにそうじをするようにしている
3. ほかの人はどうでも、自分はまじめにしている
4. しかたなくしている
5. そうじをするように言われてから、はじめる
6. 遊びながらしている
7. そうじをしないで遊んだり、ほかのところへ行ってしまったりする



1　小学４年　　2　小学６年　　3　中学２年

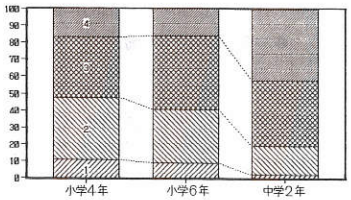
そうじのとき，児童生徒はほかの人とどのようにかかわりながら取り組んでいるだろうか。

「すすんで班の人と相談し手分けして」「そうじをしない人がいたら，さそっていっしょに」そうじをしているなど，協力しながらそうじをしているとする児童生徒は，小学４年で４８％，小学６年で５８％，中学２年で２７％となっている。

● 話し合い活動

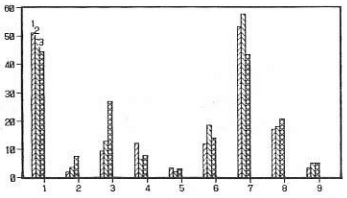
図Ⅰ－７

質問5
あなたは、学級会の話し合いのとき、自分の考えや意見を発表しますか。１つ選んでください。
1. とても多く発表する　　2. 発表する
3. あまり発表しない　　4. ほとんど発表しない



図Ⅰ－８

※ 質問５で３か４を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。２つまで選んでください。
1. どんなことを言えばよいかわからないから
2. 自分にあまり関係ないから
3. だれかが言ってくれると思うから
4. まわりの人がひやかしたり、笑ったりするから
5. 言ってもだれも聞いてくれないから
6. まちがうといけないから
7. 自信がないから
8. はずかしいから
9. その他（　　）



1　小学４年　　2　小学６年　　3　中学２年

学級会の話し合いで，自分の意見や考えを「あまり発表しない」「ほとんど発表しない」とするものは，小学４年で５３％，小学６年で５９％，中学２年で８１％である。その理由としては，「自信がないから」「どんなことを言えばよいかわからないから」とするものが多く，「だれかが言ってくれると思うから」も少なくない。

ウ 「統制することができる態度」について

● みんなで使う物のつかい方

〔児童生徒〕

質問11
あなたは、日ごろ、ほうきやちりとりなど、そうじのときみんなで使うものをたいせつにしていますか。１つ選んでください。
1. とてもたいせつにしている
2. たいせつにしている
3. あまりたいせつにしていない
4. たいせつにしていない

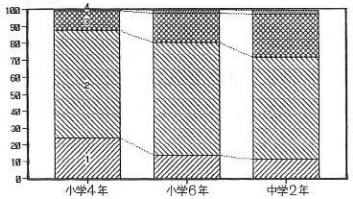
〔教　師〕

質問2
あなたは、日ごろ、あなたの学校の児童生徒をみてどう思うことが多いですか。
(1)～(13)の項目について次の［　　］の中から１つ選んでください。

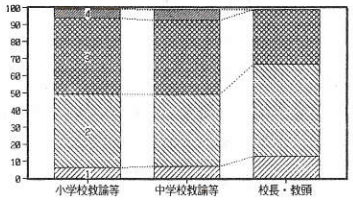
1. いつもそう思う	2. 時々そう思う
3. あまりそう思わない	4. ほとんどそう思わない

(12) みんなのものを大切にすることができる

図Ⅰ－９



図Ⅰ－10

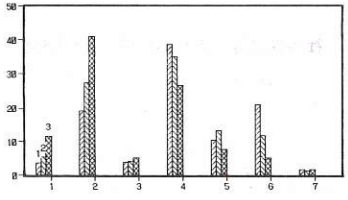


そうじの時，ほうきやちりとりなどみんなで使う物を「とてもたいせつにしている」「たいせつにしている」と答えている児童生徒は，小学生で８５％，中学生で７２％であり，小・中学生の大方はみんなで使う物を大切に使っているとしている。一方，児童生徒が「みんなのものを大切にすることができる」かについて，「いつもそう思う」「ときどきそう思う」とする教師は，小学校で５０％，中学校で４９％であり，教師の評価の方が厳しい。

● 教室の美化

図Ⅰ－11

質問12
教室のごみ箱がいっぱいになって、まわりに紙くずがちらばっています。そんなとき、あなたはどうすることが多いですか。１つ選んでください。
1. 気にならないので、そのままにしておく
2. 気になるが、そのままにしておく
3. 紙くずだけはごみ箱のそばにまとめる
4. 紙くずをひろってごみ箱におしこむ
5. そうじ当番や係りの人に、ごみをすてるようにおねがいする
6. 自分でごみをすててくる
7. その他（　　）



1　小学４年　　2　小学６年　　3　中学２年

教室のゴミ箱がいっぱいになって紙くずがちらばっているとき，「紙くずをひろってゴミ箱におしこむ」「そうじ当番や係りの人に，ごみをすてるようにおねがいする」「自分でごみをすててくる」とするものが，小学４年で７１％，小学６年で６０％，中学２年で４０％である。一方，「気にはなるが，そのままにしておく」とするものは，小学４年で１９％，小学６年で２７％，中学２年では４１％であり，学年が進むにつれて高くなっている。

● 授業中（勉強中）の態度

「すすんで自分の考えや意見を言うようにしている」「わからない人がいたら，おしえるようにしている」「さわがしい人がいたら，注意するようにしている」とこたえた児童生徒は，学年が進むにつれて少なくなる。また，「勉強中，ほかのことを考えていることがときどきある」「教科によって，勉強の態度が変わることがある」とこたえたものが多く，学年が進むにつれてこの傾向が強くなっている。「わからないことがあったり，あきたりするとまわりの人にめいわくをかけることがある」とこたえたものは，小学生で９％，中学生では１０％と率は低いが，留意する必要がある。

○ 調査の分析からみてのまとめ

「交わることができる態度」は，集団の中で過ごしていくうえで欠くことのできないものであるので，もっと高めていく必要がある。そのためには，まず，学級の集団生活や活動の中で児童生徒の交流を広め深めていくことが大切であろう。ごくわずかではあるが，つき合いもせず，ひとりでいる児童生徒もみられることにも注目したい。

清掃活動を通してみると，日ごろ，互いに協力しながら進んで仕事をしていくことに消極的であるようにみえる。また，学級会の話し合い活動をみると，自信がなかったり依存的であったりして，みんなで，より良く話し合ったり計画したりすることが不十分であるように思われる。これらのことから，「協力しながら自治的に活動することができる態度」は身についていないといえる。

授業の場面や，教室のゴミ箱がいっぱいになって紙くずがちらばっている時，どうするかという場面における児童生徒の実態，また，みんなで使う物を大切にしているかどうかについての教師の評価などから，「統制することができる態度」は十分身についているとはいえない。

② 社会性の育成を図る指導の実態調査

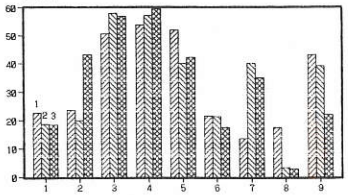
ア 児童生徒の社会性を育成する場面について

図Ⅰ－12

質問3

あなたは、学校教育活動の中で児童生徒の社会性を育成しようとするとき、どんな場面が適切だと思いますか。３つまで選んでください。

1. 教科指導　2. 道徳の時間
3. 学校・学年行事　4. 児童会活動か生徒会活動
5. 学級会活動　6. 学級指導
7. クラブ活動や部活動（小学校はクラブ活動）　8. 休み時間
9. 清掃・作業



1．小学校教諭等　2．中学校教諭等　3．校長・教頭

学校の教育活動の中で，児童生徒の社会性を育成するのに適切だと思う場面として，小学校教諭等は児童会活動（５４％），学級会活動（５２％），学校・学年行事（５１％），清掃・作業（４３％）の順にあげている。中学校教諭等は学校・学年行事（５８％），生徒会活動（５７％），学級会活動，クラブ活動や部活動（４０％）の順にあげている。校長・教頭は児童会か生徒会（６０％），学校・学年行事（５７％），道徳の時間（４３％），学級会活動（４２％）の順にあげている。

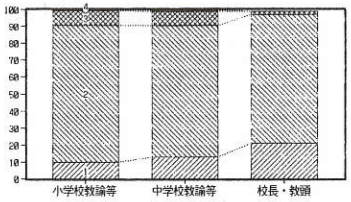
イ 特別活動の実践を通して，児童生徒に変容がみられるか

図Ⅰ－13

質問6

あなたは、あなたの学校の児童生徒が、日ごろの特別活動や諸行事の実践活動を通して学校生活に自信や意欲を持ち、学習や生活態度に望ましい変容が見られるようになったと思いますか。１つ選んでください。

1. おおいに見られる　2. ときどき見られる
3. ほとんど見られない　4. まったく見られない



小学校教諭等　中学校教諭等　校長・教頭

特別活動の指導を通して，児童生徒が学校生活に自信や意欲をもち，学習や生活態度に望ましい変容が「おおいに見られる」「ときどき見られる」とするこたえは，小学校の教諭等，中学校の教諭等でともに９０％，校長・教頭で９７％である。

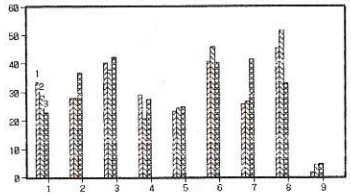
ウ 児童生徒の社会性を育成する上での問題点について

図Ⅰ－14

質問9

あなたは、あなたの学校で、児童生徒の社会性を育成する上で、問題になることはなんですか。３つまで選んでください。

1. なにを指導すればよいのか、ねらいがはっきりしていない　31
2. どのような場面で指導したらよいのかはっきりしていない
3. どのような方法で指導すればよいのかよくわからない　32
4. 教師間の共通理解がなかなか得られない
5. 教師全員が協力して取り組むことが難しい　33
6. 児童生徒の社会性に対する関心が薄い
7. 児童生徒の社会性を育成しようとする気持ちが、教師自身にまだ不十分である
8. 時間的なゆとりがない
9. その他（　　）



1．小学校教諭等　2．中学校教諭等　3．校長・教頭

児童生徒の社会性を育成する上での問題点として，多くあげられていることは「指導の時間的なゆとりがない」が４８％，「児童生徒の社会性に対する関心が薄い」が４３％，「どのような方法で指導すればよいのかよくわからない」が４０％である。また，「なにを指導すればよいのか，ねらいがはっきりしない」が３１％である。

○ 調査の分析からみてのまとめ

教師は児童生徒の社会性の育成にあたって，特別活動の諸場面がその育成を図る主要な場面と考えている。また，特別活動における実践を通して，児童生徒の望ましい変容が期待できると考えている。今後さらに，社会性の内容をとらえることによって社会性の重要性をより一層認識し，また，児童生徒にもその重要性を意識させていくことが必要である。

児童生徒の社会性を高めていくためには，児童生徒にできるだけ自らの力で実践をさせていくという場面づくりを，計画的に，組織的に図る必要があろう。

(2) 社会性の到達度からみての分析と考察

ここでは，第1年次における児童生徒を対象にした実態調査の結果を，社会性の到達度の観点からとらえ直し，分析と考察を加える。

表Ⅱ－1は，第1年次に実施した児童生徒対象の質問紙の中から，「各質問項目において社会性がついていると評価できる選択肢」を抽出したものである。ここで言う社会性の到達度とは，表Ⅱ－1の社会性がついていると評価できる選択肢を選んだ児童生徒数をパーセントで表し，社会性がどの程度育成されているのかをみようとするものである。

① 社会性の到達度の学年別，領域別の比較検討

表Ⅱ－2は，各学年の各質問項目における到達度を表したものであり，これをダイヤグラムで示せば図Ⅱ－1のようになる。また，表Ⅱ－3は，各学年の各領域・総合における到達度を表したものである。

表Ⅱ－3により各学年の社会性の到達度を比較してみると，総合においては，小学4年の到達度が最も高く64.4%，次いで小学6年の58.0%であり，中学2年の46.4%は最も低いという結果になっている。このことは，各領域ごとにみても同様である。また，表Ⅱ－2，図Ⅱ－1により，各質問項目ごとにみても，質問10における小学4年と小学6年の逆転のほかは，全て同じ結果である。つまり，社会性の到達度は，総合，各領域，さらには各質問項目においても学年が進むにつれて低くなっているのである。

表Ⅱ－2　　各質問項目における到達度

(%)

領域	質問項目	到達内容	小学4年生	小学6年生	中学2年生
A 交わることができる態度	質問 2	学級の中でほとんどみんなとつきあっている。	72.1	68.6	66.6
	質問 3	学級の人にあいさつをしている。	96.0	87.1	77.2
	質問 4	授業中，先生とお話しをするとき，ていねいな言葉を使っている。	88.5	77.1	70.3
	質問15	休み時間をおおぜいの友達と過ごしている。	55.9	55.4	52.6
	質問16	遊びの仲間に入れない人がいたとき，自分からすすんでさそっている。	33.8	19.9	12.3
	A領域の平均		69.3	61.6	55.8
B 活動することができる態度 協力しながら自治的に	質問 5	学級会などの話し合いの時，自分の考えや意見を発表している。	47.9	40.9	18.8
	質問 6	学級会の話し合いで，他の人と考えが合わなかったとき，ほかの人の意見も聞き，自分の考えも言うようにしている。	54.9	54.7	43.6
	質問 7	学級の係活動を一生懸命にしている。	83.4	72.6	60.9
	質問10	そうじの時，すすんで班の人と相談し手分けしてそうじをしたり，さそって一緒にそうじをするようにしている。	48.5	57.3	26.4
	質問17	クラブや部活動で，仕事が遅かったりうまくできない人がいたとき，教えたり手伝ったりしている。	54.6	51.6	44.9
	B地域の平均		57.3	55.3	39.8
C 統制することができる態度	質問11	そうじの時，みんなで使うものを大切にしている。	93.2	80.3	71.7
	質問12	教室のゴミ箱がいっぱいになってちらばっているとき，自分でゴミをひろい，すててくるか，係の人に，ゴミをすてるようにお願いしている。	75.9	60.0	39.4
	質問13	授業中，次のようにしていることが多い。 ○　先生やみんなの話をよく聞くようにしている。 ○　すすんで自分の考えや意見を言うようにしている。 ○　わからない人がいたら，教えるようにしている。 ○　さわがしい人がいたら，注意するようにしている。 ○　ほかの人に迷惑にならないように静かにしている。	53.6	45.2	33.5
	C領域の平均		69.1	57.7	44.5

会性の到達度の観点か

問項目において社会性
性の到達度とは，表Ⅱ
ントで表し，社会性が

これをダイヤグラムで
における到達度を表し

いては，小学４年の到
の 46.4％は最も低い
また，表Ⅱ－２，図Ⅱ
学６年の逆転のほか
らには各質問項目にお

（％）

小学６年生	中学２年生
68.6	66.6
87.1	77.2
77.1	70.3
55.4	52.6
19.9	12.3
61.6	55.8
40.9	18.8
54.7	43.6
72.6	60.9
57.3	26.4
51.6	44.9
55.3	39.8
80.3	71.7
60.0	39.4
45.2	33.5
57.7	44.5

表Ⅱ－1

各質問項目において，社会性がついていると評価できる選択肢

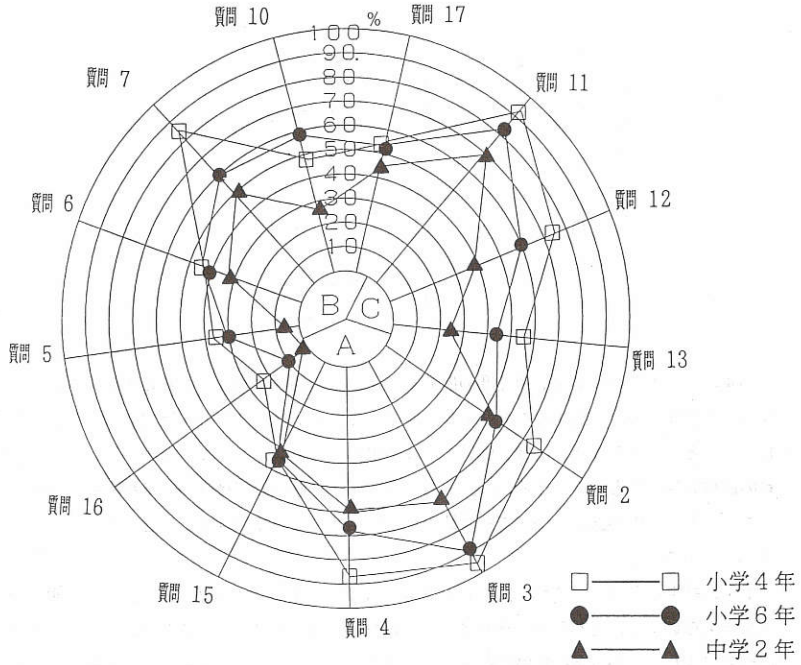
領域	社会性の内容	質問項目	質問内容（選択肢数）	社会性がついていると評価できる選択肢
A 交わることができる態度	互いに他を認め，意思を通じ合ったり付き合ったりすることができる態度	質問 2	学級の中でどのくらいの人とつきあっているか。(3)	① ほとんどみんなとつきあっている。
		質問 3	学級の人にあいさつをしているか。(4)	① いつも言っている。 ② ときどき言っている。
		質問 4	授業中，先生とお話しするとき，ていねいな言葉を使っているか。(4)	① いつも使っている。 ② ときどき使っている。
		質問 15	休み時間をどのように過ごしているか。(3)	② おおぜいの友達と過ごしている。
		質問 16	遊びの仲間に入れない人がいたとき，どのようにしているか。(7)	④ 自分からすすんでさそう。
B 協力しながら自治的に活動することができる態度	集団へ参加し，その中で自分の役割を果すことができる態度 互いに協力して仕事をしていくことができる態度 計画したり，話し合ったり，実行したり，学級会などの集団を自分たちで運営できる態度	質問 5	学級会などの話し合いのとき，自分の考えや意見を発表するか。(4)	① とても多く発表する。 ② 発表する。
		質問 6	学級会の話し合いで，他の人と考えが合わないときどうすることが多いか。(9)	② ほかの人の意見も聞くようにする。 ⑥ ほかの人の意見も聞き，自分の考えも言うようにする。 ⑦ 学級のみんなからも考えを聞くようにする。
		質問 7	学級の係活動をしているか。(4)	① とても一生懸命にしている。 ② 一生懸命にしている。
		質問 10	そうじのとき，どのようにしていることが多いか。(7)	① きれいに，はやくできるように，すすんで班の人と相談し手分けしてそうじをしている。 ② そうじをしていない人がいたら，さそって一緒にそうじをするようにしている。
		質問 17	クラブや部活動で，仕事がおそかったりうまくできない人がいた時，どのようにしていることが多いか。(7)	② 自分からすすんで，おしえたり手伝ったりしている。 ⑤ ほかの人といっしょに，おしえたり手伝ったりしている。
C 統制することができる態度	集団内のルールや規範を守る態度	質問 11	そうじの時，みんなで使うものを大切にしているか。(4)	① とても大切にしている。 ② 大切にしている。
		質問 12	教室のゴミ箱がいっぱいになってちらばっているとき，どうすることが多いか。(7)	④ 紙くずをひろってゴミ箱に押しこむ。 ⑤ そうじ当番や係りの人に，ゴミをすてるようにおねがいする。 ⑥ 自分でゴミをすててくる。
		質問 13	授業中どのようにしていることが多いか。(9)	① 先生やみんなの話をよく聞くようにしている。 ② すすんで自分の考えや意見を言うようにしている。 ③ わからない人がいたら，おしえるようにしている。 ④ さわがしい人がいたら，注意するようにしている。 ⑥ ほかの人のめいわくにならないように静かにしている。

図Ⅱ－1　　各質問項目における到達度

A：交わることができる態度

B：協力しながら自治的に活動することができる態度

C：統制することができる態度

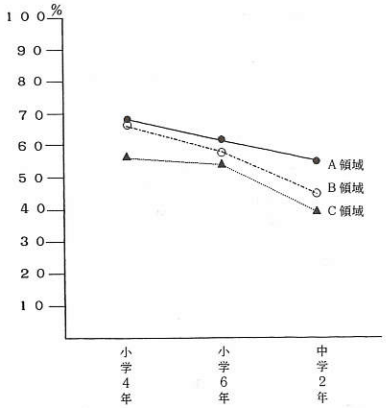


表Ⅱ－3　　各領域・総合における到達度

学年 / 領域	小学４年（９１９名）	小学６年（９００名）	中学２年（８３７名）
社会性Ａ（交わることができる態度）	69.3％	61.6％	55.8％
社会性Ｂ（協力しながら自治的に活動することができる態度）	57.3％	55.3％	39.8％
社会性Ｃ（統制することができる態度）	69.1％	57.7％	44.5％
総合	64.4％	58.0％	46.4％

さらに，各領域における到達度をみると次のような特徴がみられる。図Ⅱ－２は各学年の各領域における到達度を表したものである。

図Ⅱ－２　　各領域における到達度



いずれの学年においても，到達度の最も高い領域は社会性Ａの「交わることができる態度」，次いで社会性Ｃの「統制することができる態度」であり，社会性Ｂの「協力しながら自治的に活動することができる態度」は最も低いという結果になっている。また，学年が進むにつれていずれの領域の到達度も低くはなるが，とりわけＢ領域・Ｃ領域の到達度の低下が顕著である。

このように学年が進むにつれて社会性の到達度が低くなっていることをどのようにとらえたらよいのであろうか。

上記の結果から即，小学６年と中学２年，とりわけ中学２年に「社会性」の能力がないとは言えないように思われる。それは，今回の児童生徒における実態調査の質問が，「あなたはいつもどうしますか」と行動場面をとらえて児童生徒個々の態度を聞いているからである。態度は能力だけでなく行動の要素を伴っており，能力が行動に発展して初めて態度となると考えると，この結果は理解が行動を伴っていないことの表れと推量できる。

確かにこの時期は，より一層自我に目覚め，自己を強く意識すると同時に他を強く意識する時期であり，集団の前や他人がいる場面で良い子ぶっていると思われたくないので引っ込むという傾向をもっている。また，この時期は，小学校の低学年の児童にみられるように，大人から教えられたことをその理由を十分にはとらえることもないままに行動する段階から，その理由を自分なりにとらえ直す，いわゆる社会性もまた質的に転換していく時期であるからである。このような成長段階における特性が，行動が表に出にくいことに反映し，低い到達度となって表れているものと思われる。

ただし，このようにとらえても，本調査でみるかぎり能力が行動に発展し態度が形成されるというような社会性は育ってはいないと言わなければならない。ただ，中学２年の結果を詳細に分析すると次のようなことがみられるのも事実である。

Ｃ領域の質問１２の「教室のゴミ箱がいっぱいになって散らばっているとき，どうすることが

多いか」は，上記のような特性をもつ中学２年にとって，行動が表に出にくい難しい場面である。実際，学年全体の到達度は３９.４％に過ぎない。しかし，質問１２の到達度をＢ領域の質問７「学級の係活動をしているか」の到達度と関係づけてみると，学級の係活動を「一生懸命にやっている生徒」の質問１２における到達度は４９.１％なのに対し，「一生懸命にやっていない生徒」の到達度は２４.６％に過ぎず，その到達度に大きな差がみられる。このことは，中学２年には成長段階における特性からくる行動が表に出にくいという傾向がみられるが，指導のいかんによっては行動まで高められるという指導の可能性を示唆していると言える。この意味でいずれの学年においても行動にまで高める指導が大切であり，その可能性を実践的に検証することが大切なことであると思われる。

表Ⅱ－４は，各学年において，全領域を含む総合した到達度の高い上位校（１０校）と到達度の低い下位校（１０校）の各領域における到達度の分布状態を表したものである。

表Ⅱ－４　　上位校，下位校における各領域の到達度分布(度数分布)

※　有意差あり

a

小学４年生 A領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	0	0	1	1	7	1	20.0	※
下位校	0校	0	0	0	5	5	0	0	0	0		

b

小学４年生 B領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	0	0	5	5	0	0	20.0	※
下位校	0校	0	1	3	4	2	0	0	0	0		

c

小学４年生 C領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	0	0	2	6	2	0	14.67	
下位校	0校	0	0	1	3	2	4	0	0	0		

d

小学６年生 A領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	0	0	4	5	1	0	16.8	
下位校	0校	0	0	0	2	7	1	0	0	0		

e

小学６年生 B領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	0	0	7	2	1	0	20.0	※
下位校	0校	0	1	2	5	2	0	0	0	0		

f

小学６年生 C領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	0	0	5	4	1	0	20.0	※
下位校	0校	0	2	2	4	2	0	0	0	0		

g

中学２年生 A領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	0	4	6	0	0	0	7.14	
下位校	0校	0	0	1	4	3	2	0	0	0		

h

中学２年生 B領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	7	3	0	0	0	0	20.0	※
下位校	0校	0	2	8	0	0	0	0	0	0		

i

中学２年生 C領域	到達度の分布(%) 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	χ²検定	有意差
上位校	0校	0	0	0	2	4	4	0	0	0	16.0	
下位校	0校	0	2	6	2	0	0	0	0	0		

χ^2検定は，上位校・下位校において，それぞれの社会性の到達度の分布に有意の差がみられるかどうかを判断するために用いた統計の方法である。χ^2の数値が 16.92 より大きいときに有意の差があると判断するのが一般的である。ただし，判断を誤る危険性は5％ある。

到達度の分布をみると，B領域（ｂ・ｅ・ｈ）には，いずれの学年においても上位校・下位校における到達度の分布に大きな違いがみられる。また，χ^2検定の数値も有意の差があることを示している。このことは，B領域の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の到達度が，上位校と下位校の到達度，つまり学校ごとの総合の到達度に大きな関連があることを示している。言い換えれば，B領域の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の向上が，ある手立てによって期待できるということを示唆していると言えよう。

さらに有意の差は，小学４年のＡ領域「交わることのできる態度」（ａ）と小学６年のＣ領域「統制することのできる態度」（ｆ）にもみられ，これらの領域の到達度もそれぞれの学年の総合の到達度に大きく関連していることがわかる。

② 社会性の各領域間の関連性

①における分析と考察から，現在の児童生徒における社会性の指導は，いずれの学年においても最も到達度の低いB領域「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成に焦点を合わせなければならないことがわかるし，また指導の効果も期待できる。ただし，その指導は，３つの領域の密接な関わりのもとに進めなければならないことは言うまでもないことである。

では，社会性の３つの領域は相互にどのように関わっているのであろうか。

表Ⅱ－５は，各学校の２領域の到達度の間で相関係数を求めたものである。

表Ⅱ－５　　社会性の３つの領域間の相関関係

数字はピアソンの相関係数

学年 ＼ 領域間	小学４年	小学６年	中学２年
B領域とA領域	0.73（表－６）	0.59	0.43（表－10）
B領域とC領域	0.66	0.84（表－８）	0.80（表－９）
A領域とC領域	0.72（表－７）	0.66	0.48

相関係数は，２つの要素についての相関関係の強さを計算し，数値化したものである。一般にこの値が0.7以上であれば「高い相関がある」と言われている。

さらに，表Ⅱ－６から表Ⅱ－１０は主な２領域間の相関表である。表Ⅱ－６から表Ⅱ－９は高い相関がみられた領域間を示したものであり，表Ⅱ－１０は最も低い相関がみられた領域間を示したものである。

表Ⅱ－６　　小学４年におけるB領域とA領域の相関表

B領域 ＼ A領域		到達度（%） 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	計（校）
到達度	90以上～100未満											0
	80～90											0
	70～80							1		4		5
	60～70							1	1	4	1	7
	50～60					2		3	3			8
	40～50					3	2	3				8
	30～40						3					3
	20～30					1						1
	10～20											0
	0～10											0
計（校）		0	0	0	0	6	5	8	4	8	1	32

表Ⅱ－７　　小学４年におけるA領域とC領域の相関表

C領域 ＼ A領域		到達度（%） 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	計（校）
到達度	90以上～100未満											0
	80～90									2		2
	70～80							6	2	4		12
	60～70					2	3	1	2	2	1	11
	50～60					2		1				3
	40～50					1	2					3
	30～40					1						1
	20～30											0
	10～20											0
	0～10											0
計（校）		0	0	0	0	6	5	8	4	8	1	32

表Ⅱ－８　　小学６年におけるB領域とC領域の相関表

C領域 ＼ B領域		到達度（%） 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	計（校）
到達度	90以上～100未満											0
	80～90									1		1
	70～80						1	4	1			6
	60～70					1	3	5	1			10
	50～60					3	4					7
	40～50				2	1	1					4
	30～40					2						2
	20～30			1			1					2
	10～20											0
	0～10											0
計（校）		0	0	1	2	7	10	9	2	1	0	32

表Ⅱ－９　　中学２年におけるB領域とC領域の相関表

C領域 ＼ B領域		到達度（%） 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	計（校）
到達度	90以上～100未満											0
	80～90											0
	70～80											0
	60～70					2	2					4
	50～60				2	1	2					5
	40～50				3	3						6
	30～40			1	6							7
	20～30			1	1							2
	10～20											0
	0～10											0
計（校）		0	0	2	12	6	4	0	0	0	0	24

表Ⅱ－10　　中学２年におけるB領域とA領域の相関表

B領域 ＼ A領域		到達度（%） 0%以上～10%未満	10～20	20～30	30～40	40～50	50～60	60～70	70～80	80～90	90～100	計（校）
到達度	90以上～100未満											0
	80～90											0
	70～80											0
	60～70											0
	50～60						2	2				4
	40～50						3	3				6
	30～40				1	3	5	3				12
	20～30					1		1				2
	10～20											0
	0～10											0
計（校）		0	0	0	1	4	10	9	0	0	0	24

学年別にその相関係数を比較してみると，小学４年では，Ｂ領域とＡ領域，Ａ領域とＣ領域の相関係数が高く，しかも0.73，0.72とほとんど同じなのに対し，Ｂ領域とＣ領域は，0.66と低くなっている。一方小学６年では，Ｂ領域とＣ領域の相関係数が最も高く0.84，次いでＡ領域とＣ領域0.66，Ａ領域とＢ領域0.59の順である。この傾向は，中学２年においても同様である。ただし，Ｂ領域とＣ領域の相関係数が他領域間のそれよりも極めて高く0.80を示している。

さらに，領域間別に比較してみると，Ｂ領域とＡ領域，Ａ領域とＣ領域の相関係数はともに，学年が進むにつれて低くなっているのに対し，Ｂ領域とＣ領域のそれは，小学６年から高くなっている。

つまり，小学４年ではＢ領域とＡ領域，Ａ領域とＣ領域の相関が高く，それらは学年が進むにつれて低くなっていくのに対し，小学６年からは，Ｂ領域とＣ領域の相関が極めて高くなるということである。

以上のことは，Ｂ領域の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成においては，主に次のような他領域との関連のもとに指導することが大切であることを示している。それは，小学４年では，Ａ領域の「交わることができる態度」の育成との密接な関わりのもとにＢ領域を指導することであり，小学６年と中学２年では，Ｃ領域の「統制することができる態度」の育成との密接な関わりのもとにＢ領域を指導するということである。

では次に，Ｂ領域「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を図るためにはどのような指導をすればよいのだろうか。ここでは，Ｂ領域の質問項目を中心にすえ，それと他領域の質問項目との関係を詳細に探ることにより，一つの方向を明らかにしたい。

まず，Ｂ領域の質問項目の中から，この領域の代表的な質問として質問５・７・10を取り出した。質問７を例にとれば，以下の手順は次のようである。

質問７　あなたは，日頃，学級の係活動（学級の仕事）を一生懸命にしていますか。
１つ選んでください。
1. とても一生懸命にしている　　2. 一生懸命にしている
3. あまり一生懸命にしていない　　4. ほとんどしていない

次に，表Ⅱ－１の「各質問項目において，社会性がついていると評価できる選択肢」をもとに，児童生徒を選択肢１・２を選んだ「到達群」と選択肢３・４を選んだ「非到達群」という二つの群に分けた。そして，二つの群のＡ・Ｃ領域の各質問におけるそれぞれの到達度を算出し，二つの群のその到達度の間にどのような差があるのかをみることにより，Ｂ領域の質問がＡ・Ｃ領域の質問とどう関わっているのかを明らかにしたいと考えた。図Ⅱ－３～図Ⅱ－５は，二つの群のＡ・Ｃ領域の各質問におけるそれぞれの到達度を棒グラフに表したものである。

図Ⅱ－３はＢ領域の質問７「学級の係活動をしているか」について表したものである。

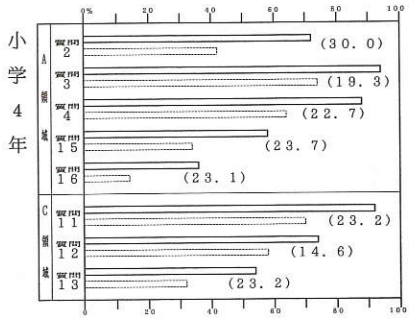
図Ⅱ－３　Ｂ領域の質問７とＡ・Ｃ領域の質問との関係

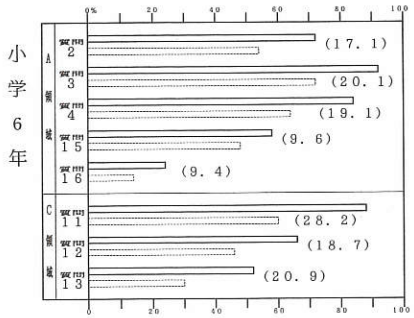
「学級の係活動をしているか」

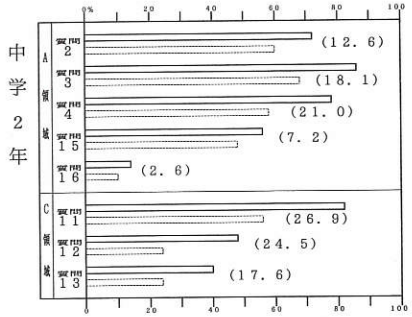
	小学４年	小学６年	中学２年
到達群	746名	667名	510名
非到達群	172名	232名	326名

到達群…□　非到達群…⬚

（ ）の中の数字は，二群間の到達度の差である。







このグラフをみると，いずれの学年でもＡ・Ｃ領域の全ての質問において，二つの群のそれぞれの到達度の間には差があることがわかる。Ａ領域をみると，その差は小学４年において，顕著である。ほとんどの質問において20％を超えており，特に質問２における二群間の到達度の差は30.0％の大きさである。このことは，前記の３つの領域の相関関係において，小学４年はＢ領域とＡ領域の相関が高いという結果を裏付けている。しかしその差は，質問３，質問４を除けば，学年が進むにつれて小さくなる傾向を示している。一方，Ｃ領域では，いずれの学年においても全ての質問に同じような差が認められる。この領域では特に，中学２年の質問12「教室のゴミ箱がいっぱいになって散らばっている時，どうすることが多いか」において，学年全体の到達度が低いのみでなく，二群間の到達度の差が24.5％と大きいことにも注目したい。

以上のことは，いずれの学年においても，Ｂ領域の質問５「学級の係活動をすること」はＡ領域の「交わることができる態度」，Ｃ領域の「統制することができる態度」と密接に関連してい

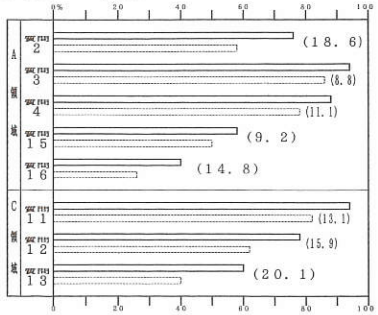
ることを示している。言い換えれば，「学級の係活動を一生懸命にすること」は，「交わることができる態度」や「統制することができる態度」の育成に関わっていると言えよう。特に小学校４年においては，「学級の係活動をすること」は「交わることができる態度」との関連が強いと言えそうである。

図Ⅱ－４は，質問１０「そうじのとき，どのようにしていることが多いか」について表したものである。

図Ⅱ－４　　Ｂ領域の質問１０とＡ・Ｃ領域の質問との関係

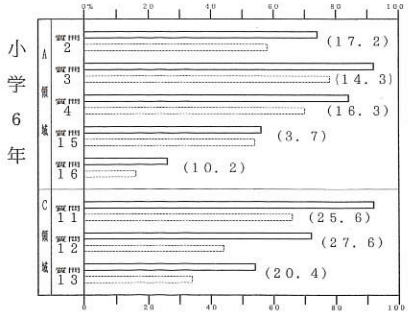
「そうじのとき，どのようにしていることが多いか」

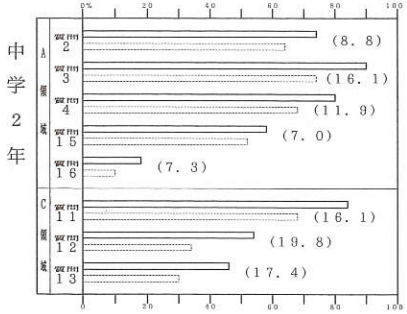
	小学４年	小学６年	中学２年
到達群	４３８名	５１８名	２２２名
非到達群	４８０名	３７８名	６１３名



到達群…□　　非到達群…⋯

( )の中の数字は，二群間の到達度の差である。





このグラフをみると，いずれの学年でもＡ・Ｃ領域の全ての質問において，二つの群のそれぞれの到達度の間には差があることがわかる。その中でも大きな差がみられるのはＣ領域においてである。特に，小学６年においてはＣ領域の全ての質問に２０％以上の差がみられる。このことは，前記の３つの領域の相関関係において，小学６年はＢ領域とＣ領域の相関が高いという結果を裏付けている。また，質問１３「授業中どのようにしていることが多いか」において，いずれの学年でも二群間の到達度の間に約２０％の差がみられることに注目したい。

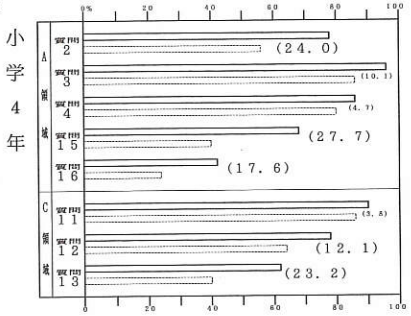
以上のことは，いずれの学年においても，Ｂ領域の質問１０「そうじのとき，どのようにしていることが多いか」はＡ領域の「交わることができる態度」・Ｃ領域の「統制することができる態度」，とりわけＣ領域の「統制することができる態度」と密接に関連していることを示している。言い換えれば，「そうじのとき，すすんで班の人と相談し手分けしてそうじをしたり，さそって一緒に掃除をすること」は，集団内のルールや規範を守るという「統制することができる態度」の育成に関わっていると言えよう。特にこのことは，小学６年において顕著である。

図Ⅱ－５は，質問５「学級会などの話し合いのとき，自分の考えや意見を発表するか」について表わしたものである。

図Ⅱ－５　　Ｂ領域の質問５とＡ・Ｃ領域の質問との関係

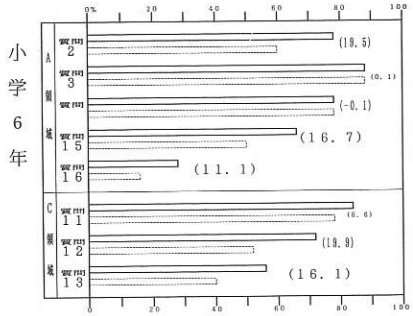
「学級会などの話し合いのとき，自分の考えや意見を発表するか」

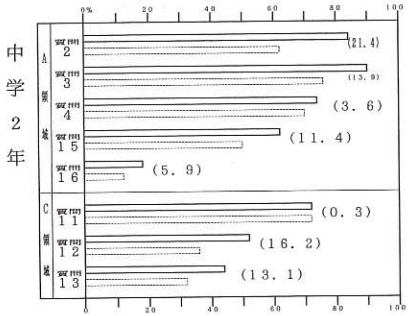
	小学４年	小学６年	中学２年
到達群	４３７名	３６５名	１５８名
非到達群	４８２名	５３４名	６７８名



到達群…□　　非到達群…⋯

( )の中の数字は，二群間の到達度の差である。





このグラフをみると，いずれの学年でもＡ・Ｃ領域のほとんどの質問において，二つの群のそれぞれの到達度の間に差があることがわかる。特に，いずれの学年でも大きな差がみられるのはＡ領域の質問２「学級の中でどのくらいの人とつきあっているか」においてである。Ａ領域の質問１５「休み時間をどのように過ごしているか」とＣ領域の質問１３「授業中どのようにしてい

ることが多いか」においては，小学４年では大きな差がみられるが，学年が進むにつれてその差は小さくなっている。

以上のことは，Ｂ領域の質問５「学級会などの話し合いのとき，自分の考えや意見を発表するか」には，いずれの学年でも「学級の中でどのくらいの人とつきあっているか」が密接に関連しており，小学４年ではさらに，「休み時間の過ごし方」や「授業中どのようにしていることが多いか」が関連していることを示している。

以上のように，第１年次における児童生徒を対象にした実態調査の結果を，社会性の到達度の観点からとらえ直してみると，次のようなことが言えそうである。

いずれの学年においても社会性の到達度の最も低い領域は，社会性のＢ領域，すなわち「協力しながら自治的に活動することができる態度」の領域であり，この領域の到達度が社会性全体の到達度に大きく関わっている。そのことは，現在の児童生徒の社会性を高めていくためには，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成に焦点を合わせなければならないことと，そのことによって，指導の効果も期待できるということを示している。ただし，その指導は，「交わることができる態度」「統制することができる態度」の育成との密接な関連のもとに進めていかなければならないことは言うまでもない。３つの領域の相関関係は，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成において，小学４年では主に「交わることができる態度」の育成と関連づけること，小学６年と中学２年においては主に「統制することができる態度」と関連づけることを示唆している。具体的には，Ｂ領域の質問と他領域の質問との関係をみると，特に「学級の係活動を一生懸命すること」と「そうじの時，互いに協力して仕事をしていくこと」は，いずれの学年においても「交わることができる態度」「統制することができる態度」との関連が強く，そのような指導が，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成のみでなく，社会性全体の伸びにもつながる一つの方向を示していると言えそうである。

３　「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成についての基本的な視点

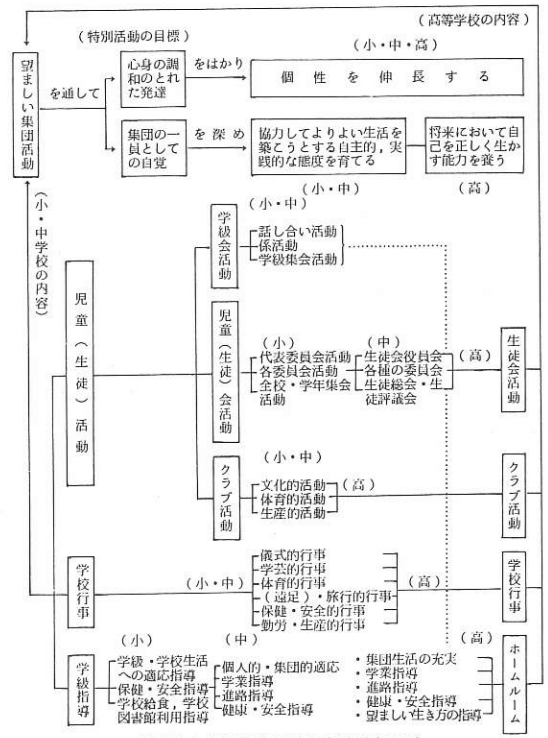
児童生徒の社会性の領域の中では，小・中学生を通して，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の到達度が最も低いことが分かった。また，「協力して自治的に活動することができる態度」の領域は社会性のその他の領域と強い関連性をもっているので，その育成を図っていくことは社会性の他の領域を育成していくことにもつながるということが分かった。

そこで，社会性の育成を，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成に焦点化することにし，その育成を図っていくうえでの基本的な視点を次のように考える。

(1)　特別活動の活性化を通しての育成

「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成はすべての活動を通して図られていくものであるが，特に，特別活動を通して図られていくものであることは，その目標「望ましい集団活動を通して，心身の調和を図り，個性を伸長するとともに，集団の一員としての自覚を深め，協力してよりよい生活を築こうとする自主的，実践的な態度を育てる」をみても明らかである。そこで，特別活動をより一層充実し，活性化していくことが，とりもなおさず，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を積極的に進めていくことになるといえよう。

図Ⅲ－１　　特別活動の目標と内容の概観



（図書文化「生徒指導の基本と教育相談」P62）

(2) 小さな集団および縦割り集団における活動を通しての育成

① 小さな集団における活動を通しての育成

学校生活では，多くの集団があり，多様な集団活動がなされる。児童生徒はこれらの集団に参加し，活動することを通して，その社会性が育成される。したがって，それらの集団活動は，児童生徒にとってどれも大切であるといえる。

しかし，前述の，社会性の到達度からみての分析と考察や児童生徒の社会性についての実態調査を通して言えば，児童生徒の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成は，とりわけ，「小さな集団活動」を通して進めていくことがより有効であると考える。

例えば，学級会の話し合い活動の場面で，児童生徒の実態をみると，小学４年で５３％，小学校６年生で５９％，中学２年では８１％の児童生徒が自分の意見や考えを言わないと答えている。その理由として，「自信がないから」「どんなことを言えばよいかわからないから」「だれかが言ってくれるから」をあげている児童生徒がとても多い。また，「だれかが言ってくれるから」は，学年が進むにつれて多くなっている。このように，自信がもてなくて依存的な多くの児童や生徒たちにとって，活動しやすい集団，人に依存することがしにくく，自らせざるを得ないような集団が必要である。そのような集団とは，学級及びそこに基づいた，比較的小さな集団であろう。

そこで，小さな集団，すなわち，学級及びそこに基づく少人数の常時的な活動を通して児童生徒の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を図っていくことが必要であり，効果的であると考える。

② 縦割り集団における活動を通しての育成

縦割り集団の活動とは，学年や学級の枠をはずし，上級生・下級生の異学年（異年令）の児童生徒から構成される集団で行う活動である。学校における活動の場面としては，児童会・生徒会活動，学校行事，クラブ活動，清掃活動などがあげられよう。

縦割り集団で行う活動は，上級生の下級生に対する励ましやいたわりの気持ちを育てていくとともに，下級生の上級生に対する尊敬や信頼の気持ちを育てる働きをもつといわれる。また，児童生徒の社会性の向上を促す働きをもつともいわれる。

縦割り集団で行う活動がもつといわれるこの働きは，児童生徒の社会性についての実態調査からもうらづけられるように思われる。調査の質問９から，小学校において，横割り班（同学年，同学級の児童で編成される班）で清掃を行っている場合と縦割り班で清掃を行っている場合がみられるが，質問１０で選択肢１及び２を選んでいる児童の割合は，小学４年，小学６年とも縦割り班のほうが多い。特に，小学６年における差異は非常に大きい。すなわち，縦割り班で清掃を行っている方に，「進んで協力しながら清掃をしている」とする児童の割合が多いといえる。

質問9
あなたの掃除の班はどれですか。１つ選んでください。
1. 同じ学級の人たちだけでできている班（横割り班）
2. いろいろな学年の人たちがまじっている班（縦割り班）

表Ⅲ－１

	小学4年	小学6年	中学2年
1	63.1%	64.1%	98.9%
2	36.8%	35.3%	0.8%

質問10
あなたは、掃除のとき、どうしていることが多いですか。１つ選んでください。
1. きれいに、はやくできるように、すすんで班ののの人と相談し手わけして掃除をしている
2. 掃除をしていない人がいたら、さそっていっしょに掃除をするようにしている。
3. ほかの人はどうでも、自分はまじめにしている
4. しかたなくしている。
5. そうじをするように言われてから、はじめる。
6. 遊びながらしている。
7. 掃除をしないで遊んだり、ほかのところへ行ってしまったりする。

表Ⅲ－２

	質問９で１を選んだ者（横割り班）		質問９で２を選んだ者（縦割り班）	
	小学４年	小学６年	小学４年	小学６年
質問10で選択肢１，２を選んだ者の合計人数	242	258	151	227
成員の総数	563	560	308	284
割合（％）	43.0	46.1	49.0	79.9

縦割り集団での活動は，学年制とくらべて，より一層の指導の手間や教師間の協力が要求されるが，このような集団における活動を充実させ，それを通して児童生徒の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を図っていくことが必要であり，効果的であると考える。

4　「協力しながら自治的に活動することができる態度」を育成する具体的な方策

児童生徒の実態から小さな集団，縦割り集団を通して児童生徒の社会性，とりわけ「協力しながら自治的に活動することができる態度」を育成していくことが必要であり，効果的であるという基本的な視点から，それをどのように育成していけばよいかについて，すぐれた実践を行う学校の事例を参考にしながら，その具体的な方策を探る。

(1)　小さな集団の活動を通しての育成

①　学級会活動

ア　活動内容

Ａ校は児童数６５０ 名ほどの中規模の小学校である。次第に都市化しつつある地域にあり，隣接する２つの小学校の学区の子ども達の混成からなる学校として，数年前に発足した。

児童生徒の実態から「豊かに生きる力を育てる指導」が必要であるとの共通認識のもとで，学級会活動を中心としてそのような指導を行ってきている。

豊かに生きる力とは，思いやりをもって他と協力できる力，めあてをもって自発的・自治的に活動できる力，やるべきことを最後までやり通すことができる力である。

また，そのような力を高めていくためには，集団活動，自治的活動，実践的活動を通して進めていくことが大切であり，そしてまた，学級会活動を基盤として進めていくことが必要であると考えている。

さて，学級会の話し合い活動については，その基本過程と主な活動内容を下の表のようにとらえ，それを基盤にすえて指導を行った。

学級会活動の基本過程と主な活動

図Ⅳ－１ 話合い活動

◦児童　◎教師

活動			主な活動内容
事前	議題案収集と決定	気づく	◦学級生活の中に自分たちの力で解決したり，実践したりできる問題があることに気づく。 ◎議題発掘の観点なども目のつくところにはっておく。
		提案する	◦気づいた問題を進んで議題案としてポストに入れる。 ◎議題カード，議題ポストなどの準備やポストに入れるよう励ましの助言は惜しまない。
		選ぶ	◦全員が議題案について話合い，議題を決める。 ◦取り上げなかった議題については，提案者が納得いくように処理する。 ◎提案理由を話し合わせ，今一番必要な議題を取り上げるよう助言する。
	実施計画案の作成と提示	計画する	◦計画委員会ではつぎのことを話し合う。 ・提案内容の検討　・話し合う順序　・話し合うときの役割分担 ・資料の準備 ◦実践を見通して話合いがすすめられるよう司会，記録などの打ち合わせをする。 ◎自治的範囲をこえないように，場所，時間，材料など知らせる。
		考えをもつ	◦実施計画を「学級会コーナー」などで事前に全員が知る。 ◦予告にもとづいて，「学級会ノート」や「学級会メモ」などに自分の考えをまとめておく。 ◎提案内容にそった自分の考えを用意するよう励ます。
事中	話合い	話合う	◦提案内容を考えながら発言する。 ◦相手の考えを理解して，自分の考えを発表する。 ◦実践を見通して，解決できる方向で話し合う。 ◦司会，記録は話合いの順序にそってすすめる。 ◎助言はできるだけ控え，自発的・自治的な活動を促すという形ですすめる。 自治的活動の範囲をこえるようなとき，問題の中心から離れるようなとき，実践の見通しがもてないようなときは助言する。 ◎終末助言では活動を通しての助言と意欲づけをわすれない。
事後	実践	行う	◦話合いの決定にそって，実践計画をたてる。 ◦役割を分担する。 ◦協力しながら，計画に従って実践する。 ◎自分の仕事は最後までやり通すよう見守る。
		反省する	◦つぎの点について反省する。 ・実践活動は楽しかったか　・それはどうしてか　・今度するときどうするか ◎一連の活動の余過程にわたり，問題や成果を見つけさせ，活動の大切さをわからせ意欲づけをする。

評価

その指導の実践を通して話し合い活動を自発的・自治的な活動として，また，すべての児童が進んで参加する集団活動として活発化していくためには，次のことが特に大切であるとしている。

○　計画委員会の構成に配慮し，計画委員会の仕事をきっちりさせることが話し合い活動の活発化につながる。すなわち，児童全員が計画委員を経験できるようにすることが大切で輪番制を原則としてグループ編成をしている。計画委員会の仕事 ── 議題案の収集・整理（２～３人にしぼる）・決定（全員にはかる），話し合いの実施計画作成（内容，順序，時間の割り振り，役割分担等），実施計画の予告，資料作成などを１週間の日程に組み入れて確実に実践させる。

○　議題の見つけ方をわからせ，議題の選定の過程を大事にし，予告された議題について考えさせておくことが話し合い活動の活発化につながる。高学年などでは，学級目標の具現化に結びついたり，学級の生活を耕していくような議題を見つけさせる。議題を絞っていく計画委員会の話し合いの段階を大事にし，全体に図って議題を決定する。また，議題や実施計画を学級会用黒板等を活用して予告し，考えさせておく。

○　小集団やグループでの話し合いを活用することが話し合い活動の活発化につながる。小集団やグループでは，全体の前で発言できないでいる児童も疑問点を明らかにすることができたり，自分の意見に対する友達の反応を感じとったりして話し合いえ進んで参加することにつながる。発言することができない児童には，学級会だけでなく教科学習などさまざまな場で，小集団やグループでの活動体験が必要である。

次に，係り活動についてであるが，活動の基本過程に基づいて次のような指導の実践を行っている。

図Ⅳ－２ 係の活動

◦児童　◎教師

活動	主な活動内容
組確する	◦学級内で必要な仕事を自分たちで見つけ，個人の希望や特性を生かして分担する。 ◦学年に応じた人数で係を組確する。 ◦学級の実態に即し，係の改廃，整理統合をする。 ◎時期をみて，係を交代させ，各種の係を経験させる。
計画する	◦学年に応じ，係ごとの活動計画を立てる。 ◎計画，反省，活動に必要な用紙や用具は，児童が自由に使えるように用意しておく。
活動する	◦分担した仕事を最後までやりとげる。 ◦定期的に各係ごとに話合い，仕事を改善したり，創意工夫したりする。 ◦当番活動と係活動の区別をはっきりし，活動する。 ◎各係と学級全体の交流の場をもたせ，学級生活の向上のために係の活動があることを意識させる。
反省する	◦活動の記録を書き，計画と見比べて反省し，次の計画や活動に役立てる。 ◎反省の場を定期的に設け，問題や成果を見つけさせ，活動の大切さをわからせる。

評価

○　係り活動の組織としては，低学年は一人一役の形から始め，中学年では３～６人で１つの係を作る。高学年では係の活動と児童会の活動の仕事が重なって負担過重になることを避けて，委員会と同一メンバーで係を組織する。係の活動内容は委員会のそれにこだわらず，自由に決めてよいことにする。

○　ほとんど創意工夫の余地のない活動は当番活動に移し，係り活動は創意工夫ができ，ユニークで楽しいものになるようにしている。児童が工夫した活動の例は，欠席者への連絡やお見舞い（お便り係），係りコーナーの飾りつけ（美化係），学習に関係あるおもしろい記事の紹介（スクール係り），誕生係などがある。

係の仕事そのものは嫌いではないが，何をどうやるか分からないと活動しない。また1週間に1度位の活動が適切で充実感をもつようである。そこで，月や周毎のゆとりある計画をたてさせ，「いつ，だれが，どんな仕事をするか」をはっきりさせている。

○　常時活動として，休み時間，放課後を利用して活動している。1単位時間の利用としては，学級会活動のうち，学期2～3時間をすべての係が活動内容を話し合い，学期又は月の長期の計画立てや反省などにあてている。

イ　成果

A校では，話し合い活動や係り活動など学級会活動の指導を通して，児童生徒の豊かな力，すなわち「みんなが参加し，協力して自発的・自治的に活動できる力」がどのように高まっているかについて，次のような評価をしている。

○　低学年では児童が興味を示す集会活動と係り活動を中心として，みんなでいっしょにやる楽しさをわからせながら，「みちびき」の指導姿勢であたってきた。その結果，学級会活動の進め方が少しずつ分かり，パターンにのった話し合いができるようになり，学級会を自分たちの手で進められるようになった。

○　中学年では目標の理解やいろいろな役割の体験を通して，学級会活動に積極的に取り組むようになってきている。活動に自発性も見られるようになり，かなり自治的な活動も出来るようになっているが，なお，経験が浅いので，教師の助言が必要となる場面が少なくない。児童の自発性，自治性をそこなわないような「よりそい」の指導に配慮している。

○　高学年では「つきはなし」の指導体制で取り組んできた。それは，児童の自発性，自治性を大切にするということで，陰ではきめ細かい援助があることは言うまでもない。計画委員会の輪番制を取り入れて，これまで数多く経験しているので，話し合いの手順がわかってきただけでなく，司会者への協力や相手の立場に立って考える話し合いが出来るようになってきている。

○　活発な活動にするために，係内の話し合いを多くもつことにより，実践を見通した活動計画を立てられるようになった。集会活動は集会に向けての練習の過程を大切にしているので実施に向かってグループでどう取り組むかリーダーを中心に考えられるようになり，協力して活動できるようになっている。

ウ　要点

○　A校の事例を通して，教師間の共通理解と協力体制は実践を通して深まってくるものであることがわかる。

○　A校では，低・中・高学年においてそれぞれ，「みちびき」「よりそい」「つきはなし」の指導体制で取り組んでいるように，児童の自発性や自治性は教師のさまざまな指導の手が加わって育ってくるものである。また，児童の発達の段階にそって，指導の姿勢を違える必

要がある。

○　ゆとりの時間等を活用して時間をつくり，年度初め推進委員会に申し込み日課表に繰りこんでいる。学級会活動は1週間に1回実施する。また，集会活動での体験の積み重ねも大切であるとしている。児童の活動の時間や場を保証し確保することが必要である。下にA校の例をあげておく。

○　児童は活動やそれにかかわる仕事そのものは嫌いではないことが多いが，何をどうやるかが分からないとしない。何をどうやるか，計画に従ってきっちり指導すると活発になるといえる。特に事前指導を徹底することが大切であろう。

○　全体の前で発言したりすることが出来ない児童が多くて学級会活動が不活発な場合には，小集団やグループ活動を活用することが必要である。学級会活動の中だけでなく，教科学習の場などでも，日ごろ，小集団やグループ活動を生かすことも必要である。学級会活動が活性化すると，さまざまな集団の活動に生き生きした影響を与えるように思われる。

表Ⅳ－1　A校の週時程表

	月	火	水	木	金	土	
AM 8：05			〈門	門〉			8：05
8：30							8：30
8：40	児童朝会	職員朝会	〃	〃	〃	職員朝会	8：35
8：45		朝の会	〃	〃	〃	朝の会	8：45
8：50	移動					1	
8：55	朝の会	1	〃	〃	〃	移動	9：30
9：35	1	移動	〃	〃	〃		9：35
9：40	移動					2	
9：45		2	〃	〃	〃	遊歩	10：20
10：25	2						10：35
10：30		遊歩	〃	〃	〃	3	
10：45	遊歩						11：20
10：50	移動	〃	〃	〃	〃	移動	11：25
	3	〃	〃	〃	〃	4	
11：35	移動	〃	〃	〃	〃		12：10
11：40	4	〃	〃	〃		移動	12：15
PM12：25						終わりの会	12：25
	給食	〃	〃	〃	〃	児童昇降口 南門	12：30
1：10	遊歩	〃	〃	〃	〃		
1：25	移動	〃	〃	〃	〃		
1：30	清掃	〃	横割清掃	清掃	〃		
1：45	移動	〃	〃	〃	〃		
1：55	5	〃	終わりの会	5	〃		
2：40	終わりの会	〃	児童下校（2：15）	終わりの会	〃		
2：50	学年・学級の時間	〃	市教研の場合 清掃 1：15～1：30	移動 クラブ活動	各委員会 学年・学級の時間		
3：30							
4：00			〈児童昇降口閉門〉				

A校の週行事予定表

		月	火	水	木	金	土
1							
2							
3							
4							
5							
6							
毎週	一週	学校朝会 学年学級時間 担任会3：40～	学年学級時間 学年部会 3：40～	市小教研 通学班長会 2：10～	生活指導部会 4：00～	学年学級時間	
毎週	二週	低学年朝会 学年学級時間 担任会3：40～	学年学級時間 学年部会 3：40～	市小教研	生活指導部会 4：00～	児童会各委員会 3：10～	
毎週	三週	児童朝会 学年学級時間 担任会3：40～	学年学級時間 学年部会 3：40～	運営委員会 代表委員会 2：10～	生活指導部会 4：00～	学年学級時間	
毎週	四週	真学年朝会 学年学級時間 担任会3：40～	学年学級時間 学年部会 3：40～	H　員　会	生活指導部会 4：00～	児童会各委員会 3：10～ 研究推進委員会 3：40～	
毎週	五週	学校朝会 学年学級時間 担任会3：40～	学年学級時間 学年部会 3：40～	自由時間	生活指導部会 4：00～	学年学級時間	

1.　賞状伝達……学校朝会と児童朝会で。　2.　転入児はその月の児童朝会で紹介する。
3.　転出児はＴＶで給食時に紹介する。

② 学級の班活動

B校は，学校の統廃合により昭和56年度にスタートした生徒数1041名の大規模な中学校である。統合後，それ以前の各中学校の良さを生かしながらも新しい学校独自のものを模索し，学校行事の検討に取り組んできた。特に修学旅行的行事は，各種の学校行事の中で最大規模のものであるにもかかわらず，業者や一部の担当教師にまかせてしまう傾向のあった行事である。だからこそ，この修学旅行的行事に生徒と教師の主体性を回復することは大きな意義があると考えたのである。

変革に向けての動きがスタートして5年，その検討の過程では年次的な取り組みということを念頭において進められた。すなわち，1年目にできること，2年目ならできそうなことというように検討を進め，段階的に理想に近づけようとしたのである。昭和63年度の修学旅行においては，学級ごとに設定した学習テーマに沿って東京都内とその近郊から旅行のコースを選定し，そのコースを学級単位又は班単位で回っている。

このように修学旅行を年次的段階的に進めていくことと同時に，1年生の段階，2年生の段階というように旅行的行事を3年計画で企画していくことにより，系統的にねらいを達成するように考えている。

ア 活動の内容

（ア）生徒の活動組織と活動内容

集団行動を通して個人および集団の自主性，自立性を育成するために，2年生の11月からの6カ月間すべてが修学旅行の過程であるという認識で臨んでいる。そのため，2年生3学期の生活班が旅行の班になるように班編成は早い時期に行い，日常生活の取り組みがそのまま修学旅行の取り組みになるようにしている。また，「自分たちの手で作り上げる」という意識を育てるために，学年実行委員会，学級討議，学年総会を意図的計画的に位置づけている。

○ 学年実行委員会

各クラス2名の代表で構成され，修学旅行の中核となる組織である。この委員会では修学旅行のねらい，方針などのほかに，生活のきまりや約束，コースについての考え方，事前学習の進め方など旅行全般にわたって骨組みになることを検討し，学級討議，学年総会などに原案として提示していく。この委員会は2年生の2学期に組織し，実際の活動は1月から始める。

○ 学級実行委員会

学年実行委員の2名に，班長6名を加えて計8名で構成される。学年総会，学年実行委員会の決定を受けて，学級の取り組みを具体化していくための原案を検討するとともに，実際の取り組みの中心となる。修学旅行を広い意味での学習の場としてとらえていくことから，特に，学年のテーマを受けての学級の学習テーマの設定やコースの選定にあたっては，学年全体の基本的な考え方を十分に反映していく。

学習を実質的なものにするために次のように段階的に進めている。

- 学級ごとに大きなテーマを設定する。
  学級の学習テーマの例：「首都東京・情報化社会の流れをつかむ」
- テーマに沿って事前学習を十分にする。
- 実際にそこに行っての「見る」「聞く」「感じる」「考える」などの活動によって学習を深める。
- 学級のミーティングや学年集会で互いの学習を確認しあう。

なお，旅行記は感想文集とせず学習の記録として残るようなものとする。そのため，帰ってきてから学習の報告書をまとめるのではなく，宿舎に戻ってその日のうちにまとめる作業をする。

コースの選定のもとになる日程を組む場合の割合は，学習が1日半（班行動を含む），観光，あそび，ショッピングがそれぞれ半日をおおよその目安としている。

表Ⅳ－2 スケジュール例（1組の3日目のスケジュール）

	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12時
3日目	起床	集会	朝食	班行動（昼食） 1班(東京駅) 4班(秋葉原) 2班(夢の島) 5班(東京都庁) 3班(新宿) 6班(新宿区役所)				原宿 ショッピング			宿舎に戻る		夕食	入浴	クラスミーティング 報告書作り			消灯	

○ 班会

2年生3学期の生活班を基本として男女混合の6班を作り，取り組みの単位としている。編成にあたっては，いわゆる「好きな者同士」にならないように配慮されている。班では学級の学習テーマに沿った班行動における学習やコースの検討などのほかに，日常の生活に対する取り組みも並行して行っていく。班の中には，次のような係を設けて全員が分担して仕事にあたるようにしている。

- 班長（1名）
  班の学習やコースの検討の中心となる。また，生活についての班単位の取り組みの中心でもある。さらに，学級旅行委員会のメンバーとして学級全体の取り組みの原案作りにも加わる。
- 副班長（資料係）（1名）
  班長とともに班単位の学習や生活に対する取り組みの中心になる。また，資料集めや保管の責任者ともなる。
- しおり係（1名）
  事前学習のしおりや生活のしおりの編集及び印刷にあたる。
- 整美係（1～2名）

ゴミの始末，部屋の整理整頓，風呂やトイレの使い方の点検，スリッパの脱ぎ方の指導などにあたる。

- 保健係（１名）
  班員の健康状態の把握，食事に関することの指導にあたる。
- 写真係（１名）
  フィルムの枚数に応じて，どこでどれだけの写真をとるかの計画を立てるとともに，フィルムの取りまとめ，注文の取りまとめにあたる。
- レクリエーション係（１名）
  学級単位のレクリエーション活動，学年交流会の運営にあたる。

以上のような係としての役割分担のほかに，スケジュールの中でのリーダー，報告書作りも班長のみでなく全員が分担してあたる。

（イ）活動の状況（話し合いなどの活動は主にゆとりの時間を活用する。）

表Ⅳ－３　活動の状況

	実行委員会	学級会	学年	ＰＴＡ
11 12	実行委員の選出		旅行の概念指導	
1 月	組織作り ねらい，方針の原案作成	コース作成作業 班編成		
2 月	きまり，約束の原案作成 しおり原稿作成	きまり，約束の学級討議 しおり原稿作成，事前学習	きまり，約束の決議	説明会
3 月	しおり印刷 学年集会・合同係会の企画	しおり学習 コースの決定	意識を高めるための集会	成績配布時に意識を高めるための説明
4 月	きまり，約束の細部の確認と徹底 学年集会の企画	しおりを使った事前学習	意識を高めるための集会	学級指導の授業参観
	旅行の実施			
	旅行の総括 報告書作成，報告会企画	旅行の総括 報告書作成	学習の成果を確かめ合う 学年集会	学年集会の参観

イ　成果

（ア）この旅行を通して生徒が目に見えて変わっていった。特に，ミーティングを通して，大事な役割をもつ一人一人が自分とまわりの集団とを見つめなおし，協力，個人としての自立，他を思いやる心などを学んでいった。

（イ）長期の修学旅行への取り組みを通して，学年全体及び各学級のリーダーは自信を持って行動できるようになってきた。教師の適切なアドバイスとともに，生徒の自主的活動を大切にし，生徒自らが考え，話し合い，行動する場面を多く設定してやることによって生徒は紆余曲折の道程を経験し育っていく。

（ウ）早い時期（１月）に班編成を行い，旅行に対する取り組みと日常生活に対する取り組みを並行して進めたことは，旅行を一時のお祭騒ぎに終わらせないばかりでなく，そこで得た成果をその後の学校生活において，クラスのまとまりとして生かすことができた。

（エ）班行動においては一人一人の生徒がリーダーになるためにものすごい緊張を経験する。一方，そのことは教師にとっても刻々と変化する生徒の行動に対する注意が常に必要だということであり，ともに緊張感のある中で真にふれあいながら主体性のある旅行ができたと考えている。

（オ）学習したコースは事前に詳しい学習をし，明確なテーマを持って望んだことにより，学ぶことが多く，自分の将来や地域と関係づけた深い内容の報告書となっている。

ウ　要点

（ア）生徒に主体的な取り組みを要求するのであれば，教師は共通理解を図りながら，生徒の上をいくだけの研修・研究が必要である。旅行は学級作り，学年作りである。この旅行で生徒に何を学びとらせることができ，どのように指導し，それから得た成果をその後の学校生活（学級集団，学年集団，学校のリーダーとして）にどう有効に生かしていけるのかという課題に意識して取り組み，教師の指導性を発揮することが必要である。

（イ）集団行動を通して個人および集団の自主性・自立性を育成することは，学年全体，学級，班，個人における生徒の活動を長期の見通しを持って意図的，計画的に組織していく必要がある。その組織のあらゆる場面で生徒一人一人が明確な責任ある役割をもち，長期に協力しながら主体的な取り組みをすることによって，初めて生徒は「自分たちで作り上げた」という意識と「自治的に活動することができる態度」を身につけるようになると思われる。

(2) 縦割り集団活動を通しての育成

① 清掃活動

C校は開校92年目を迎え常設分校児童を含めて388 名の学校である。縦割り清掃活動は，20年以上前から本校の伝統として受け継がれてきている。その清掃活動は，教師と子どもの人間関係を教室以外でも深めさせること，校内外の整美などについて進んで協力しながら清掃活動をすることをねらいとしている。

この縦割り清掃活動によって，子供達が個々の学年として果たす役割や他の子どもとの関わりを自覚し，その良い面が教育活動全般に波及してきている。

ア　活動の内容

（ア）縦割り全校一斉清掃

○　本校生1年生から6年生まで，357 人を学校全体の清掃箇所32カ所に分けて一斉に行う。3週間で次の清掃場所に変わり，1年間で15カ所回るようになってくる。指導は，班長と教師があたる。

○　班が固定してくるとマンネリ化が進んで好ましくないので，年度の初めに編成替えを行う。班の編成は，各学級ごと名簿を作成し，全体顔合わせを行いそのなかでバランスを考えた編成替えで班長，副班長を選出し，（1グループ8～10人）すぐに班長会を行い趣旨の徹底，清掃日誌の書き方，その他の注意事項などを連絡する会を設け実施する体制がためをする。

○　清掃時間は，体育着に着替えて，給食終了後15分の時間帯で行う。その前後も含めて時間帯を図示すれば次の様になる。

表Ⅳ－4

	時間帯	清掃活動の内容
準備	・清掃開始3分前	・集合合図のレコードを流す。（放送委員会）
清掃時間（15分間）	・清掃開始1分後	・人数確認，清掃のめあての発表（班長）
	・清掃開始2分後	・仕事の分担を下級生に発表（班長）
	清掃開始から2分後 ・清掃時間（10分間）	・分担された場所の清掃（全員）
	清掃開始から12分後 ・反省会（3分間） ・解散	・反省会に入る放送合図（放送委員会） ・めあての達成度とあすのめあての発表（班長） ・係り教師の点検（全員）

○　掃除の仕方の手順としては6年生が中心となって低学年を指導する。次は，掃除の手順である。

表Ⅳ－5

教室の清掃の手順	トイレの清掃の手順
1　窓をあける。 2　前から机の所まではいてごみを集める。 3　黒板の粉をとり床をふく。 4　机を前に運ぶ。 5　教室の後まではきごみを集める。 6　後の床をふく。 7　棚や机の上，戸のさんの水ぶきをする。 8　ごみ箱のごみを捨てる。 9　机の整頓をする。 10　用具の後始末をする。 11　班長が点検をし反省会を開く。	1　窓を開け，床をはく。 2　便器をたわしでみがく。落ちにくい汚れは洗剤を使う。 3　床，便器のまわりをかたくしぼった雑巾でふく。 4　ドアのしきりなどもぞうきんでふく。 5　水屋の整頓をする。（ステンレス，流し口，床など） 6　使ったぞうきんは，かたくしぼって次の日までかわくようにきちんとほしておく。

イ　成果

（ア）5～6年生は，清掃の仕方を伝えるだけでなく，学校生活を送る上での知恵の伝達の場ともなっているようで，そのつながりが，遊び時間や登下校また家庭に帰っても一緒の行動をするなど先輩を親しんだり，後輩を面倒見たりしている行動が見受けられる。また卒業してからも良い意味でつながりができ，兄弟のような関係も出来てくる。

（イ）20年来の歴史の中で行われているので，学年の仕事の役割も分かり，学年が進むにつれて仕事の分担等，指示がてきぱきとするなど意欲がでてくる。また後輩に良く思われたいとの意識が働き，協力的に行動しようという考え方もでてくる。下学年生は上学年生や教師の指示がないと動けないような指示待ち人間になってくる嫌いもあるが，学年が進むにつれて解消する。

（ウ）班長は6学年が担当するが，班長に選ばれた当初，集団の一員としてよりは，むしろ指導的立場としての認識からか，指示だけを行い自分は監督のような行動も見受けられたが，下級生を意識するようになり，良い手本を示すなどよりよい生活習慣を築くため自主的実践的な態度に変容する。

（エ）縦割り清掃活動で得た働くことの喜びは，飼育活動やその他の生産活動へもつながり，働くことに対して意欲的になってゆく。

（オ）集団として協力し協調する中で，集団への所属感を深め，集団行動における秩序と信頼感を学ぶ。さらに，集団適応への自信を深め，それが後には他への指導や自己反省などを通して積極的な意見の交換，自己主張の方法の取得など集団適応能力が培われる。

ウ　要点

○　縦割り班の集団清掃活動により，自力あるいは教師の援助を受けながら集団へ適応し社会性が次第に養われてくる。低学年のうちから高学年と接触することにより，学校での生活と家庭での生活の違いを区別し，立場と集団寄与への方法を実践を通して学んでいる。それが必然的に社会性の育成へつながっていると考える。

○　縦割り清掃活動においては，一人一人の子ども達が役割を持ちその活動などに打ち込むことを通して，児童が自己の特性能力を十分に発揮することによって，充実感や満足感を得ている。それは周囲の子ども達から大きな期待や願いがあるからではないだろうか。

○　「協力しながら自治的に活動できる態度」を育成するためには，縦割り班の活動などによって協力して仕事をする場を与え実践させ，その活動を通すことによって，子ども達でできる活動の改善策など積極的な態度が形成されるものと考える。

② 業間遊び等異年令集団活動

D校は，今年度開校10年目になる児童数706 名の中規模の小学校である。

D校では，まず子どもたちに好ましい仲間意識を育て，これを土台にして学校運営を図るために，「連帯感にささえられた望ましい集団づくり」をテーマに研究実践に取り組んできている。このことは，新しく作られた地域に本校が開校し，人と人との結びつきが少ないという地域性からもその必要性が叫ばれて生まれたものである。

望ましい連帯感は，互いに信頼し，尊重し，協力し合う人間関係に包まれた集団の中で育つものである。集団の一人一人が所属感をもち共通の目的に向った時，集団活動は活発になり，連帯感も強まると思われる。そこでD校では，集団活動を重視し，集団の中での自分と他人とのかかわり方，つまり集団に受け入れられる，集団につくす，集団に認められるという過程を異年令集団活動に求め，望ましい連帯感を育てようと考えている。

D校の異年令集団活動（縦割り活動）は，通学班・清掃・業間遊び・ゲーム集会・遠足・弁当開きなどである。ここでは，その中から同一の異年令集団で行われる業間遊び・ゲーム集会・遠足・弁当開きを取り上げる。これらの活動はすべて，学年の異なった子ども達が，遊びなどの活動を一緒にすることにより，よりよい人間関係が育つようにするというねらいのもとに，子ども達の自主的，創造的な活動を大切にしている。

ア　活動の内容

○　異年令集団の班編成

- 下学年（1・2・3年）と上学年（4・5・6年）に別れる。
- 上・下学年とも48グループで1グループは男女混合の7～9名とする。活動によっては上学年グループと下学年グループが合併して，兄弟グループを構成する。
- 各グループにリーダー1名，サブリーダー1名をおく。

（ア）業間遊び

遊びは子どもの生活そのものである。子どもが生きていく力をつけていく上で，遊びの果たす役割は大きい。しかし，D校の保護者，子どもの実態調査からは，遊び方を知らない，年上・年下の子どもと遊ばないなどの結果が出ている。そこで，遊びづくりを進める中で連帯感を育てるために，校内での遊びの輪を広げようと考えている。

この業間遊びは，毎週1回20分間の中間休みに，グランドで，上記の各グループごとの計画のもとに自由に遊ぶというものである。火曜日は上学年，木曜日は下学年である。各グループの遊びは，年度当初の自由裁量の時間における話し合いにより，その計画を立ててはいるが，業間遊びの時間内においても話し合って修正を加えている。子ども達が良くやる遊びとしては，上学年では，長なわとび，はこづめ，一輪車乗り，遊具を使った遊びなど，下学年では，鬼ごっこ，なわとび，ゴムとび，だるまさんがころんだ，竹馬などである。その遊びは，業間遊び以外の曜日における遊びよりはレパートリーが広く，またいろんな創意工夫がみられる。

（イ）ゲーム集会（6月）

ゲーム集会は，どちらかと言えば自己中心に陥りやすい環境で育っている子ども達を，仲

間に対して心を開いた，のびのびと明るい生き生きした子ども達に育てたいというねらいのもとに，自由裁量の時間に全児童の参加によって行われている。この集会でのグループは，上学年・下学年グループを合わせた48の兄弟グループである。その1年生から6年生までを含む大きな異年令集団が1つのまとまりをもち，グランドいっぱいに広がって集団ゲームをすることにより，どの子も同じ仲間という連帯感をより一層高めることをねらいとした。

ゲームの内容は，○個人競技でなく，集団で行えるもの，○みんなができるもので，創意工夫したもの，○協力し，工夫すれば勝てるもの，○身近な用具を使って，いつもできるものに留意し，集会委員会が中心になって考える。小鳥おに，つなぎおに，ジャンケンおになどである。

（ウ）遠足（10月）

D地域の児童は比較的体験行動に乏しく，利己的で連帯感に欠けるところが多く見られ，そのことが生活，学習指導の上で一つの隘路になっている。このことは児童の「主体性」を育てる上でも問題になっている。そこで，苦楽を共に体験できる行事は，連帯感を生み出す大きなエネルギー提供の場であることを確認し，特に遠足を取り上げ，行事の見直しを図っている。

学校行事は，ややもすると子どもの参加態度が受動的になりやすい。D校では，上・下学年ともに縦の連携を重視して，上記の異年令集団による遠足を実施し，準備の過程で一人一人の意識づくりを行い，集団の中で共通の目的に向かって，励まし，ささえあう気持ちを育てるようにしている。

まず，教師の作った遠足の原案は班長会に提示され話し合う。次に，その案は自由裁量の時間において上学年・下学年の児童に示され，コースの説明や約束の確認がなされる。その後，子ども達はグループごとに細部の役割について話し合うのである。このような遠足についての指導は，勿論学級においても並行して行われるのであるが，上記のようなグループごとの話し合いは上学年グループでは児童中心にでき，下学年ではあくまで教師中心である。

（エ）弁当開き（6月・10月）

上記の異年令集団で土曜日にグランドや近くの公園に行って弁当開きをしている。

以上の異年令集団による活動についての話し合いは，主に水曜日の5校時にとっている自由裁量の時間を利用して行っている。

イ　成果

D校で行われているような活動は，子どもの姿にはっきりした成果としては表われにくいのではないかと思われる。しかし，数年上記のような異年令集団活動を続けていることが，次のような現在みられる子ども達の姿の一要因になっているのではないかと考える。

（ア）生活実態調査の結果をみると，以前は負の特性であったものが現在徐々にではあるが好転している傾向がみられる。たとえば，下校後の遊び時間や他学級と遊ぶ子どもの増加，また遊びの多様化などである。

（イ）一般的に言われているような問題行動を起こす子どもが少なく，児童間のいじめもほとんどみられない。

（ウ） 高学年の子ども達が低学年の子ども達を誘っている姿，清掃時に教師の指導がある程度入るとその後は班長を中心に協力しながら仕事を進めている等，縦の人間関係に望ましい傾向がみられてきている。異年令集団活動により，力を合わせることの大切さや，集団のために自分はどう参加すればいいのかに目を向け始めたことなど，助け合いの必要性を体験を通して感じとっているようである。

（エ） 次のことは，6年生の児童は異年令集団活動をどのようにとらえているかの調査結果である。

- 縦割りはいろいろな友達ができるので良い。
- とても楽しいし，班の人もいい人なのでとても楽しく活動できる。
- 他の学年の人と仲良くなるから良い。
- 普通友達でない人とも仲良くできるので，ずっと縦割り班はあってほしい。
- 協力する力がついていいと思う。
- 少し面倒くさくなることもあるけど楽しい。
- いろいろな友達と仲良しになりたい。でも少し，仲の良い友達と遊びたいところもある。

以上のように，ほとんどの子ども達は肯定的な見方をしているが，その中には，同学年の気の合った友達と遊びたいという欲求もあるように思われる。

ウ　要点

（ア） 異年令集団活動を活発なものとするには，そのもとに学級指導がなければならない。学級指導において学んだ，協力する心，優しさ，他を思いやる心，物事に積極的に向う心などが素地となり，異年令集団活動ではさらにその心をいろんな経験と交わりを通して実践し，子ども達が協力し，自力で解決するという「生きていく力」すなわち社会性を学んでいく。そのため，低学年の段階から学級指導の中で児童の心を育てていかなければならない。

（イ） D校のような中規模校において異年令集団活動を仕組んでいくことはなかなか難しい。D校の上学年・下学年に別れての異年令集団活動は，その際の一つの方向を示しているように思われる。3年生で一度リーダーを経験することは子ども達の協力するなどの心を育み，上学年における異年令集団活動に大きなプラスになっている。

（ウ） 異年令集団活動においては，教師間の共通理解に基づく綿密な計画と長期の見通しを持った指導が大切である。特に，リーダーは大きな役割を果たすものであり，学年で長い見通しを持って育てていかなければならない。

③ **生徒会活動**

E校は開校41年目を迎え，全校生徒数1033名が在籍している。中学校では大規模校の1つと数えられている。現在の生徒は大集団の中で生活している。そのことによって一部の子どもには主体的な行動をとれずに，他の子どもに追随する傾向や，他と協力して活動することに慣れていない生徒が見られてきている。そこで，E校は，生徒一人一人を生徒会活動に積極的に参画させることによって，できるだけいろいろな場で活動させたいと考えている。

生徒会活動は，学校における最も大きな集団活動である。したがって生徒の立場からは，ややもすると抽象的な組織になり，同学年同士の活動が中心となり，縦の結びつきが希薄になりやすい。また，同じ学校の生徒であるという所属感や連帯感も希薄になりやすい。そこで生徒会の組織づくり，活動の組織化などに着目し，特に生徒会全体と学年，学級との関係や委員と一般生徒とのつながりを深めることに配慮している。

ア　活動の内容

生徒会活動の中には色々な活動があるが，その中で特に縦割り活動で実践している学校祭，生徒会リーダー研修会の事例をあげてみる。

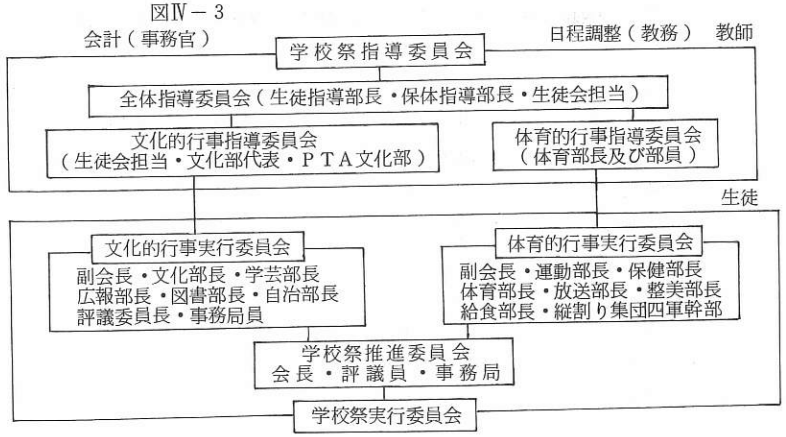
（ア） 学校祭

○　学校祭のねらい

- 文化的行事，体育的行事を学校祭に位置づけ，全生徒に各係の仕事を経験させ，伝統の継承と創意に努めさせる。
- 兄弟学級の交流と団結を図る。
- 全生徒，全職員で計画立案，準備等の活動を通して，生徒と教師の相互理解に努める。

○　学校祭の組織

図Ⅳ－3



○　内容

- 期日は，開会行事も含めて3日間で，体育的行事1日，文化的行事1日の計画とする。
- 生徒会の役員が半分に分かれそれぞれの実行委員会を作り，彼らが中心になり計画立案

をする。体育的行事は，縦割り兄弟学級４組編成として文化的行事と同時計画で進み，教師は２つに分かれ指導をする。評議員も各クラス２名のうち，１名は文化的行事の仕事を担当し他１名は体育的行事を担当する。尚，体育的行事における縦割り編成学級は下表のように編成する。

表Ⅳ－６

各　　軍	緑　軍	青　軍	黄　軍	桃　軍
各学年のクラス	１，２	３，４	５，６	７，８

・強調期間を設けて実施にあたり，特に文化的行事において発表する文化部の活動時間を確保するように努める。

・生徒も職員も出来るだけ同じ人に仕事がかたよらないようにし，全生徒，全職員で準備に当たるが，職員は生徒の仕事になるべく手を出し過ぎないようにする。

・体育的行事は，縦割り編成での団結を深めるため，一人一人が結集すれば勝てるという喜びを味わわせるため団体種目で構成する。競技内容は，伝統的種目と実行委員会で創意した競技を考える。

・文化的行事は，ステージ発表，一人一作品，教科作品展示，ＰＴＡ作品展示，チャリティーバザー，手作り創作，映画鑑賞，音楽鑑賞，フォークダンス，体力測定，アームレスリング大会，クイズ大会，特殊学級展示等を今年度行った。

（イ）生徒会リーダー研修会

○　ねらい

・宿泊訓練を通して一人一人のリーダーシップを高めると共に，縦割り活動を通してリーダー同士の親睦を深め，生徒会の団結力を育てるための基礎・基本を実技・訓練を通して学ばせる。

・集団が自治を確立する過程では，リーダーすなわち，指導者の役割が大きいことを計画的な行動を通して体得させ，生徒会やクラスのリーダーとしての自覚を促す。

・リーダーとしての物の見方考え方や，身につけたい基本的な技能を集中して指導し，さらに創造的な生徒会の運営方針や活動方針についての考え方を発表する機会を与え，積極的な活動の指針を確立させる。

○　内容

・参加生徒は生徒会専門部の新部長，副部長と１・２年の評議員が学年代表として参加する。総勢６０名（１年生２０名，２年生４０名）で縦割り班の６班編成とし，各部屋ごと一人一人係活動も行っている。

・１月の年始休業中に１泊２日で会場を自然の家を利用して行い，付き添い教員は７名である。

・研修内容は，学校の歴史，生徒会の歴史，上手な話し方，会議の進め方，全校を動かす企画と運営の講義とレクリエーション，ポスター・レタリング，歩くスキー，奉仕活動などの実技・訓練が計画されている。講師は本校教師が行っている。

イ　成果

（ア）各学級で話し合いを活発にすることにより行事は盛りあがったようである。そのことは，リーダー研修会で異学年生との練り合い学習から，事前に議題を流すことや生徒が質問するだろうと予測できる問題について，各学級の評議委員が回答を準備しなければならないということが分かったからだと思う。

（イ）核になるリーダーをクラスで選出する場合，指導力のある生徒が立候補したり，学年が進むにつれて指導力のある生徒を選出するようになった。それは１年生からの班活動を通してリーダーの必要性と大切さを経験しているためである。

（ウ）集団の成立については，話し合いの場面をもつことが大事である。さらには，本校では班会，学級会，係会，係代表会，評議員会，拡大実行委員会，全体会，と個から全体への結びつきの組織化が出来ている。その結果各集団のリーダーだけでなく全ての生徒が自信をつけたり，行事で身についたことが学校生活にも生かされてきている。

（エ）兄弟学級として縦割り集団活動を行うことや，三年生を励ます会，３年生から下級生への雑巾贈呈式などを通して先輩，後輩の伝統として良い関係が育っている。

ウ　要点

○　先輩・後輩のつながりを大切にし，社会性の育成を図る方法の１つとしては，縦割り集団活動が有効である。それはまた，共通意識，目的をもった行事などを媒介として，計画・実践を行う中で育つと考えられる。その際，教師と生徒の役割を区別し生徒の考えを十分に生かせるように配慮する必要がある。

○　生徒会の運営に当たっては，各学級での話し合いが基礎である。そのためには特にリーダーの役割が大事であり，学校の歴史的背景や運営にあたっての基礎を学習する機会をもち，リーダーが自己の役割を自覚して行動する体験をさせることも大切である。

Ⅳ　研究のまとめと今後の課題

1　研究のまとめ

(1)　社会性についての基本的な考え方について

①　児童生徒の社会性の不十分さが，児童生徒をとりまくいじめ，登校拒否などの問題の要因の１つとみなされることから，社会性の育成の必要性が強調される。また，家庭や地域がそれを育成することが少なくなっている現状から，児童生徒の社会性の育成は，学校教育の場でも意図的に進めていかなければならない課題となってきている。

②　社会性は，「交わることができる態度」「協力しながら自治的に活動することができる態度」「統制することができる態度」の３つの領域からなると考え，社会性を態度としてとらえる考え方をとった。

(2)　児童生徒の社会性の実態について

①　調査を通して，学級会，教科の授業，清掃，休み時間など，学校生活の様々な場面で，児童生徒の社会性の実態をみた。「交わることができる態度」は，集団の中で過ごしていくうえで欠くことのできないものであり，社会性の基盤をなすものであるので，もっと高めていく必要がある。

また，「ひとりですごしている」ような児童生徒は少ないけれども，留意していく必要がある。

②　「統制することができる態度」は，「みんなで使う物をたいせつにしているか」についての教師の評価や「教室のゴミ箱がいっぱいになって紙くずがちらばっているとき，どうするか」の場面などにおける児童生徒の実態から，十分身についているとはいえないようである。

③　「協力しながら自治的に活動することができる態度」は，そうじや学級会での話し合い活動などにおける児童生徒の実態からみると不十分である。これは，指導がより必要なものであり，また，発達段階に応じた指導など，適切な指導が加えられて育成されるものであると考えられる。

(3)　社会性の育成を図る指導の実態について

教師は，児童生徒の社会性の育成について，その重要性を認識しながらも，指導にあたって時間的なゆとりがないことや，どのような社会性を，どんな場面で，どのように指導したらよいのかなどについて，苦慮しているように思われる。

(4)　社会性の到達度からみての分析と考察について

①　社会性の到達度の学年別，領域別の比較検討

いずれの学年でも，社会性の３つの領域では「交わることのできる態度」の到達度が最も高く，次いで，「統制することのできる態度」「協力しながら自治的に活動することができる態度」の順である。

また，学年が進むにつれて，社会性の到達度は，各領域とも低くなる。このことは発達の視点からみれば予測されることであって，中学生は自己や他を強く意識すると共に，集団や他人の前では目立つ行動を嫌う時期である。一方，小学校中学年の児童は教えられたことを十分理解することもないままに行動しがちな時期であるからであろう。そこで，中学生の場合にはそれまで身につけた能力をできるだけ行動に発展させていくような指導が必要であり，小学校中・高学年の場合には態度が定着するような指導が必要であろう。

②　社会性の各領域間の関連性について

「協力しながら自治的に活動することができる態度」は，小学４年と小学６年では「交わることができる態度」「統制することができる態度」と関連性をもっており，中学２年では「統制することができる態度」と強い関連性をもっている。また，それは，いずれの学年でも到達度が最も低く，社会性全体の到達度を低めている。

そこで，児童生徒の社会性を高めていくためには，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を積極的に進めていくことが必要である。

(5)　「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成についての基本的な視点について

①　学校のすべての教育活動を通して図られるものであるが，特に特別活動を重視してそれを一層充実し，活性化していくことが「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を積極的に進めていくことになるといえる。

②　小さな集団及び縦割り集団における活動を通して，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を図ることが必要であり，効果的である。実態調査によって，自信がなく依存的な児童生徒が多いことがわかるが，そのような児童生徒が活動しやすく，依存しにくいような集団，すなわち，学級及びそこに基づく班，係りなどの常時的活動を通して育成を図る。また，縦割り集団の働きを認識し，活動の内容や方法を工夫しながら，育成を図る。

(6)　「協力しながら自治的に活動することができる態度」を育成する具体的な方策

①　学級とそこに基づく小さな集団での常時的な活動を通しての育成

ア　学級会活動が活発であることが学級集団全体を生き生きさせていくようである。また，学級会活動の基盤が話し合い活動であることは論を待たない。この話し合い活動を活発にしていくために，計画委員などを経験することが特に大切であり，グループ単位での計画委員会の仕事を１週間の日程できっちりさせていくことを通して，話し合い活動の活発化を図り，「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を図っていくことが必要である。

イ　係り活動は，社会性の他の領域と強く関連していることがわかる。係り活動の働きを認識し，ユニークで楽しい活動になるような工夫をさせ，何をどうやるかをはっきりさせ，休み時間や放課後の常時活動を通して，育成を図っていく必要がある。

②　学級及びそこに基づく小さな集団を基盤にしての長期的な活動を通しての育成

大きな行事として修学旅行があるが，これを３年計画で企画していくことにより，生徒の主体性，自治性等を達成しようとする活動がある。すなわち，学級やそこでの班を基盤として，１年生から班単位行動などの実践を積みかさね，２年生の１１月からの６カ月間すべてが旅行の過程であるとの認識を持って，継続した取り組みが行われる。このような見通しをもった計画のもとでの長期の主体的な取り組みを通して，生徒一人一人が自分たちがやったという意識と，協力しながら自治的に活動できる態度をもてるようになるのである。

③　縦割りによる小さな集団での常時的な活動を通しての育成

毎日行われる清掃活動は，児童生徒の「協力しながら自治的に活動することができる態度」を育成するには，適切な場面である。小学校では，縦割り班による清掃活動を行っている学校がす

くなくない。それは，より一層の指導の手間や教師間の協力を要するとも言えるが，児童間のつながりや特に高学年の児童の働く意欲や自治性等を高めるという場合が多くみられる。また，縦割り班をつくり，週1回中間休みに，様々な遊びを行っている例もある。その他に，様々な内容の活動があるであろうが，縦割り集団の働きに注目して，その常時的な活動を通して，児童生徒の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成に効果をあげることができる。

④ 縦割りによる大きな集団での活動を通しての育成

縦割りによる大きな集団での活動としては，児童・生徒会活動がある。児童・生徒会活動は，全校的な組織による自治的活動であるが，大きな集団の活動であるだけに，自分たちの活動であるとの意識が希薄になったり，苦労を避けようと役員になることを嫌う傾向もみられたりして，その活発化には課題も多い。しかし，学級とのつながりを深めたり，役員や委員などのリーダーシップを高めたり，活動内容を工夫して参加意欲を高めたりすることに配慮して，その活動を活発化することは児童生徒の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成という面への影響は大きい。また，遠足を上・下学年に分け，縦割り班を編成して行う活動もある。大きな集団活動は，それだけ大きな影響力をもち得る。縦割り集団のもつ働きを生かしながら，その活動を通して，児童生徒の「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成を図っていくことが必要である。

⑤ 「協力しながら自治的に活動することができる態度」の育成は，社会性の他の領域の育成よりも指導の手が加えられる必要があるといえる。この態度の到達度が最も低かったことは，そのこととかかわっているのだろうか。また，適切に指導すること，すなわち，児童生徒の発達段階に応じて指導の姿勢をたがえることが必要であり，児童生徒の自治的活動，実践活動であることに配慮することが必要である。

⑥ 時間的なゆとりがないという困難に対して，教師個人として計画と工夫によって対処する努力が大切であるが，同時に，放課後の時間を児童生徒の活動の時間として確保するような全体としての計画と工夫が求められる。

⑦ 児童生徒の自治的，実践的活動を通してその社会性の育成が図られねばならないことから，指導に時間や手間がかかることを考えれば，教師間の共通理解と協力体制が，特に重要である。

2 今後の課題

(1) 児童生徒の社会性の育成を図っていくために，社会性の3つの領域の関連性をさらに分析してとらえ，その上に立って学年に応じた具体的な指導方法を明らかにしていく必要がある。

(2) わずかではあるが，児童生徒の中には，「交わることができる態度」の非常に未熟であると思われるものが見受けられる。このような児童生徒は，今後増加していく傾向があると考えられるので，このような児童生徒の実態や問題に応じたきめ細かい指導方法を明らかにしていく必要がある。

資　料

昭和６３年１月

児童生徒用

学校生活についての調査

山形県教育センター

おねがい

山形県教育センターでは、みなさんの学校生活についてまとめてみたいと思っています。学校の名前やあなたの名前を書く必要はありません。あなたやあなたの学校にめいわくをかけるようなことはありませんので、思ったとおりのことをこたえてください。

質問は全部で１７あります。どの質問でも、いくつかのこたえが用意されています。その中から、あなたが思ったり考えたりしていることに近いものを、決められた数だけ（たとえば、３つまでというのは、３つ以内ということで、１つでも２つでも３つでもかまいません）選んで、その番号を□の中に書いてください。

もし、こたえの中に、あなたが思ったり考えたりしていることに近いものがなかったら、その他の（　）の中に、思ったり考えたりしていることを書いてください。

それでは、質問の前におたずねします。

(1) あなたの性別は、どれですか。

1. 男　　2. 女

□ 1

	全体	小学４	小学６	中学２
1	51.0%	51.4%	51.9%	49.7%
2	49.0	48.6	48.1	50.3

(2) あなたは、何年生ですか。

1. 小学校４年生　　2. 小学校６年生　　3. 中学校２年生

	全体	小学４	小学６	中学２
1	34.6%	100.0%		
2	33.9		100.0	
3	31.5			100.0

(3) あなたの学年には、学級がいくつありますか。

1. １学級　　2. ２学級　　3. ３学級　　4. ４学級以上

	全体	小学４	小学６	中学２
1	22.0%	29.4%	31.7%	3.3%
2	25.2	27.5	26.0	21.7
3	19.7	17.3	17.2	24.9
4	33.2	25.8	25.1	50.1

質問１　あなたは、日ごろ、学校生活が楽しいですか。１つ選んでください。

1. とても楽しい　　2. 楽しい
3. あまり楽しくない　　4. ほとんど楽しくない

	全体	小学４	小学６	中学２
1	21.6%	32.2%	21.1%	10.4%
2	62.3	57.6	68.9	60.6
3	14.0	9.2	8.8	24.9
4	2.0	1.0	1.1	4.1

※(1) 質問1で3か4を選んだ人だけこたえてください。
それはどんなときですか。3つまで選んでください。

1. 教科などの勉強
2. クラブ活動や部活動（小学校はクラブ活動）
3. 学級全体でおこなう活動
4. 学年全体でおこなう活動
5. 学校全体でおこなう活動
6. 児童会か生徒会でおこなう活動
7. そうじや作業
8. 休み時間
9. その他（　　）

5 6 7

	全体	小4年	小6年	中2年
1	49.4%	39.4%	44.9%	55.0%
2	32.9	30.9	21.3	38.0
3	21.4	26.6	20.2	19.8
4	17.4	17.0	15.7	18.2
5	25.2	22.3	22.5	27.3
6	27.3	28.7	29.2	26.0
7	26.1	36.2	28.1	21.5
8	18.8	29.8	20.2	14.0
9	7.5	12.8	3.4	7.0

※(2) 質問1で3か4を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。3つまで選んでください。

1. 勉強がむずかしいから
2. 勉強とは関係ないことをするから
3. みんなといっしょにするのがいやだから
4. いじめられるから
5. 上級生や下級生といっしょにするのがいやだから
6. 自分の思いどおりにやれないから
7. あとで人からいろいろ言われるのがいやだから
8. みんなが協力してくれないから
9. 汗を流したり、よごれたりするのがいやだから

8 9 10

	全体	小4年	小6年	中2年
1	39.5%	35.1%	27.0%	45.9%
2	12.2	12.8	11.2	12.4
3	9.6	5.3	5.6	12.8
4	12.2	26.6	15.7	5.4
5	13.9	17.0	13.5	12.8
6	21.2	19.1	20.2	22.3
7	38.4	56.4	39.3	31.0
8	18.8	25.5	16.9	16.9
9	7.5	5.3	9.0	7.9

質問2　あなたは、日ごろ、学級の中でどのくらいの人とつきあっていますか。
1つ選んでください。

1. ほとんどみんなとつきあっている
2. 決まった人としかつきあっていない
3. つきあっている人はほとんどいない

11

	全体	小4年	小6年	中2年
1	67.0%	66.8%	67.3%	66.8%
2	30.2	29.6	30.1	31.1
3	2.7	3.6	2.6	2.0

※ 質問2で2か3を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。2つまで選んでください。

1. みんなとつきあうのはめんどうだから
2. 人とつきあうのはきらいだから
3. みんなとつきあっても、自分のためになると思えないから
4. 決まった人とつきあうだけで十分だから
5. つきあいたい気持ちはあるのだが、勇気がないから
6. だれともつきあう必要はないと思っているから
7. つきあいたいと思っている人がいないから
8. つきあってくれる人がいないから
9. その他（　　）

12 13

	全体	小4年	小6年	中2年
1	7.3%	6.6%	7.8%	7.6%
2	4.1	3.9	2.7	5.8
3	3.5	3.3	1.7	5.8
4	58.0	56.4	59.5	58.1
5	28.9	27.9	28.2	30.7
6	3.8	3.3	1.7	6.5
7	26.8	22.3	32.3	26.0
8	12.0	17.4	9.5	8.7
9	7.6	7.2	10.2	5.4

質問3　あなたは、学級の人に「おはよう」「さようなら」「ありがとう」「すみません」などと言っていますか。1つ選んでください。

1. いつも言っている
2. ときどき言っている
3. あまり言っていない
4. ほとんど言っていない

14

	全体	小4年	小6年	中2年
1	32.6%	31.7%	30.2%	36.2%
2	52.9	58.4	57.0	42.3
3	9.5	8.2	8.7	11.9
4	4.7	1.6	3.3	9.4

※ 質問3で3か4を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。2つまで選んでください。

1. 言わなくてもわかるから
2. はずかしいから
3. これまでも言ってこなかったから
4. めんどうだから
5. あいさつなどはしなくともよいと思っているから
6. みんなが言わないから
7. その他（　　）

15 16

	全体	小4年	小6年	中2年
1	32.6%	27.8%	26.9%	38.5%
2	24.7	36.7	26.9	17.3
3	35.0	18.9	37.0	41.9
4	28.6	30.0	23.1	31.3
5	5.0	2.2	5.6	6.1
6	35.8	37.8	34.3	35.8
7	5.6	8.9	9.3	1.7

質問4　あなたは、授業中（勉強中）、先生とお話しするとき、ていねいなことばを使っていますか。1つ選んでください。

1. いつも使っている
2. ときどき使っている
3. あまり使っていない
4. ほとんど使っていない

17

	全体	小4年	小6年	中2年
1	28.8%	40.6%	28.1%	16.7%
2	48.6	42.2	50.3	53.6
3	16.9	12.9	16.3	22.0
4	5.5	4.2	5.0	7.5

※ 質問4で3か4を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。2つまで選んでください。

1. うまく使えないから
2. これまでも使ってこなかったから
3. 使わなくてもよいと思っているから
4. はずかしいから
5. めんどうだから
6. 使わなくても、先生がわかってくれるから
7. みんなが使わないから
8. その他（　　）

18 19

	全体	小4年	小6年	中2年
1	47.2%	51.3%	53.6%	39.7%
2	26.5	17.7	27.1	31.6
3	6.4	6.3	3.6	8.5
4	9.2	9.5	10.9	7.7
5	18.8	13.9	18.2	22.3
6	37.4	42.4	37.0	34.4
7	16.9	15.2	16.1	18.6
8	5.5	7.0	5.7	4.5

質問5　あなたは、学級会などの話し合いのとき、自分の考えや意見を発表しますか。1つ選んでください。

1. とても多く発表する
2. 発表する
3. あまり発表しない
4. ほとんど発表しない

20

	全体	小4年	小6年	中2年
1	7.3%	10.7%	8.8%	2.0%
2	28.8	36.9	31.8	16.8
3	39.4	35.7	43.6	38.9
4	24.4	16.8	15.8	42.1

※ 質問5で3か4を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。2つまで選んでください。

1. どんなことを言えばよいかわからないから
2. 自分にあまり関係ないから
3. だれかが言ってくれると思うから
4. まわりの人がひやかしたり、笑ったりするから
5. 言ってもだれも聞いてくれないから
6. まちがうといけないから
7. 自信がないから
8. はずかしいから
9. その他（　　）

21 □
22 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	47.8%	51.2%	48.7%	44.5%
2	4.7	1.9	3.6	7.5
3	17.5	9.3	12.9	26.8
4	8.4	12.0	6.2	7.7
5	2.9	3.3	2.1	3.2
6	14.8	11.8	18.5	13.9
7	50.7	53.1	57.7	43.5
8	18.9	17.0	18.2	20.8
9	4.6	3.3	5.2	5.0

質問6　あなたは、学級会の話し合いで、ほかの人と意見や考えがあわなかったとき、どうすることが多いですか。2つまで選んでください。

1. あまり気にかけない
2. ほかの人の意見も聞くようにする
3. いらいらした気持ちになってくる
4. 自分の考えをおしとおすようにする
5. ほかの人の意見にあわせるようにする
6. ほかの人の意見も聞き、自分の考えも言うようにする
7. 学級のみんなからも考えを聞くようにする
8. 先生の考えを聞くようにする
9. その他（　　）

23 □
24 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	28.8%	24.4%	25.8%	36.8%
2	47.4	50.2	51.0	40.4
3	8.9	9.5	5.9	11.5
4	6.3	7.3	6.7	4.7
5	20.6	15.3	20.7	26.4
6	35.5	38.0	38.8	29.4
7	18.8	18.0	20.8	17.6
8	9.9	12.5	10.3	6.7
9	1.3	1.1	1.6	1.2

質問7　あなたは、日ごろ、学級の係活動（学級の仕事）をいっしょうけんめいにしていますか。1つ選んでください。

1. とてもいっしょうけんめいにしている
2. いっしょうけんめいにしている
3. あまりいっしょうけんめいにしていない
4. ほとんどしていない

25 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	11.7%	19.4%	8.8%	6.6%
2	60.7	61.8	65.3	54.4
3	23.6	16.1	22.0	33.6
4	3.9	2.6	3.8	5.4

※ 質問7で3か4を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。2つまで選んでください。

1. どんなことをどのようにすればよいのかわからないから
2. ほかの人がしてくれるから
3. やる気がおきなかったり、めんどうだから
4. やってもみんなや先生から認めてもらえないから
5. 自分のする仕事がないから
6. みんなが協力してくれないから
7. どうすればよいのか、相談できる人がいないから
8. 学級の係活動（学級の仕事）は必要でないと思っているから
9. 自分のことのほうがたいせつだから

26 □
27 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	30.7%	28.5%	36.6%	27.6%
2	24.1	18.6	22.4	28.2
3	43.8	32.0	41.8	51.5
4	6.8	12.2	5.2	5.2
5	22.9	25.6	25.0	19.9
6	15.6	19.8	15.1	13.8
7	7.7	11.6	5.2	7.4
8	1.4	0.6	1.7	1.5
9	2.9	2.9	1.7	3.7

質問8　あなたは、修学旅行や遠足などに行ったときのことで、あてはまることがあったら、3つまで選んでください。

1. 人のめいわくを考えないで行動することがあった
2. 集合時間などにおくれたことがあった
3. 係りの仕事をあまりしなかった
4. ほかの人にあまり協力しなかった
5. みんなしてやろうと、協力をよびかけなかった
6. こまっている人がいても手つだわなかった
7. あとしまつをしないことがあった
8. 決まった友だちとだけ行動することが多かった
9. その他（　　）

28 □
29 □
30 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	18.3%	18.6%	19.2%	17.1%
2	21.3	13.4	26.7	24.3
3	15.8	10.4	16.7	20.7
4	16.4	16.1	15.9	17.3
5	19.7	16.3	21.6	21.4
6	9.1	11.2	7.2	8.7
7	21.2	19.4	23.3	21.0
8	54.8	51.3	54.4	59.1
9	4.0	2.8	5.9	3.3

質問9　あなたのそうじの班はどれですか。1つ選んでください。

1. おなじ学級の人たちだけでできている班
2. いろいろな学年の人たちがまじってできている班

31 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	74.7%	63.1%	64.1%	98.9%
2	25.0	36.8	35.3	0.8

質問10　あなたは、そうじのとき、どうしていることが多いですか。1つ選んでください。

1. きれいに、はやくできるように、すすんで班の人と相談し手わけしてそうじをしている
2. そうじをしていない人がいたら、さそっていっしょにそうじをするようにしている
3. ほかの人はどうでも、自分はまじめにしている
4. しかたなくしている
5. そうじをするように言われてから、はじめる
6. 遊びながらしている
7. そうじをしないで遊んだり、ほかのところへ行ってしまったりする

32 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	19.0%	20.2%	23.9%	12.4%
2	25.3	27.4	33.7	14.1
3	20.4	23.5	16.0	21.6
4	8.1	5.0	5.4	14.5
5	8.0	7.2	5.2	11.8
6	16.3	14.9	14.2	20.2
7	2.6	1.6	1.1	5.1

※ 質問10で4か5か6か7を選んだ人だけこたえてください。
それはどういう理由からですか。2つまで選んでください。

1. ほかの人もしないから
2. 遊びたいから
3. 働くことがきらいだから
4. 人といっしょにするのはめんどうだから
5. 楽しくないから
6. よごれるのがいやだから
7. しかられるのがいやだから
8. その他（　　）

33 □
34 □

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	33.1%	26.1%	29.5%	39.4%
2	36.9	32.2	36.8	39.8
3	9.5	14.8	8.1	6.9
4	3.0	5.3	2.1	2.1
5	41.6	40.9	43.6	41.0
6	4.6	6.1	3.8	4.2
7	10.0	8.3	11.1	10.4
8	7.7	9.5	9.4	5.8

質問11　あなたは、日ごろ、ほうきやちりとりなど、そうじのときみんなで使うものをたいせつにしていますか。1つ選んでください。

1. とてもたいせつにしている
2. たいせつにしている
3. あまりたいせつにしていない
4. たいせつにしていない

□ 35

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	16.4%	23.9%	13.6%	11.2%
2	63.9	64.0	66.9	60.6
3	17.8	11.3	17.4	25.4
4	1.5	0.8	1.7	2.3

質問12　教室のごみ箱がいっぱいになって、まわりに紙くずがちらばっています。そんなとき、あなたはどうすることが多いですか。1つ選んでください。

1. 気にならないので、そのままにしておく
2. 気にはなるが、そのままにしておく
3. 紙くずだけはごみ箱のそばにまとめる
4. 紙くずをひろってごみ箱におしこむ
5. そうじ当番や係りの人に、ごみをすてるようにおねがいする
6. 自分でごみをすててくる
7. その他（　　）

□ 36

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	6.7%	3.6%	5.3%	11.7%
2	28.7	19.0	27.3	40.9
3	4.4	3.8	4.3	5.1
4	33.7	38.8	35.1	26.5
5	10.6	10.6	13.3	7.8
6	13.0	21.1	11.9	5.1
7	1.7	1.8	1.3	1.8

質問13　あなたは、授業中（勉強中）、どのようにしていることが多いですか。2つまで選んでください。

1. 先生やみんなの話をよく聞くようにしている
2. すすんで自分の考えや意見を言うようにしている
3. わからない人がいたら、おしえるようにしている
4. さわがしい人がいたら、注意するようにしている
5. 教科によって、勉強の態度が変わることがある
6. ほかの人のめいわくにならないように静かにしている
7. わからないことがあったり、あきたりすると、まわりの人にめいわくをかけることがある
8. 勉強中、ほかのことを考えていることがときどきある
9. その他（　　）

□ 37
□ 38

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	36.5%	37.4%	38.0%	33.8%
2	17.1	23.0	19.7	7.9
3	10.1	13.1	9.6	7.5
4	8.5	14.0	8.6	2.3
5	39.0	34.1	35.7	48.1
6	14.9	12.9	16.0	15.9
7	9.1	7.7	10.0	9.7
8	44.8	35.7	43.4	56.3
9	2.1	1.6	2.8	1.9

質問14　あなたは、授業中（勉強中）、班で勉強しているとき、わからない人がいたらどうすることが多いですか。2つまで選んでください。

1. すすんでおしえることにしている
2. 聞かれればおしえることにしている
3. 自分のことがせいいっぱいで、ほかの人にまでおしえることができない
4. 人によって、おしえたりおしえなかったりしている
5. めんどうなので、おしえないことにしている
6. 聞かれてもおしえないことにしている
7. わからないので、おしえられない
8. その他（　　）

□ 39
□ 40

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	23.4%	33.7%	23.6%	11.8%
2	60.7	52.8	64.3	65.6
3	18.1	16.8	16.1	21.7
4	17.6	17.0	18.9	17.0
5	2.6	1.7	3.2	3.0
6	0.5	0.8	0.4	0.4
7	23.2	19.4	23.1	27.6
8	2.8	2.9	2.4	3.0

質問15　あなたは、休み時間をどのようにすごしていることが多いですか。1つ選んでください。

1. ひとりですごしている
2. おおぜいの友だちとすごしている
3. 2、3人の友だちとすごしている

□ 41

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	4.0%	3.0%	4.3%	4.7%
2	54.0	53.6	55.3	52.8
3	41.5	43.0	39.9	41.5

質問16　あなたは、遊びの仲間にはいれない人がいたとき、どのようにしていることが多いですか。1つ選んでください。

1. 人のことはあまり気にかけない
2. ほかの人から言われたらさそう
3. まわりの人と相談してからさそう
4. 自分からすすんでさそう
5. さそいたい気持ちになるが、むりにさそわない
6. きのどくだなあと思う
7. その他（　　）

□ 42

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	11.9%	5.5%	11.7%	19.2%
2	7.8	7.8	7.1	8.6
3	26.4	31.0	28.4	19.1
4	22.3	32.9	20.9	12.3
5	13.9	9.7	12.9	19.5
6	14.7	9.7	16.4	18.4
7	2.3	2.8	1.7	2.3

質問17　あなたは、クラブ活動や部活動（小学校はクラブ活動）で、仕事がおそかったり、うまくできない人がいたとき、どのようにしていることが多いですか。1つ選んでください。

1. 自分からおしえたり手つだったりしないで、ほかの人にまかせている
2. 自分からすすんで、おしえたり手つだったりしている
3. 人によって、手つだったり手つだわなかったりしている
4. 人からたのまれたら、おしえたり手つだったりしている
5. ほかの人といっしょに、おしえたり手つだったりしている
6. 自分のことがせいいっぱいで、ほかの人にまでおしえたり手つだったりできない
7. その他（　　）

□ 43

	全　体	小4年	小6年	中2年
1	4.6%	4.8%	4.0%	5.1%
2	19.4	21.1	19.2	17.7
3	12.2	10.2	11.9	14.6
4	19.4	15.7	20.7	22.2
5	30.2	29.9	33.2	27.1
6	10.1	11.2	8.2	10.8
7	3.4	6.0	1.9	2.0

ご協力ありがとうございました

昭和６３年１月

教師用

学校における児童生徒の社会性の育成についての調査

山形県教育センター

お　願　い

山形県教育センターでは、学校における児童生徒の社会性の育成についてまとめてみたいと思っています。学校の名称やあなた自身の名前を書く必要はありません。あなたやあなたの学校に迷惑をかけることはありませんので、ありのままにお答えください。

質問は全部で１２あります。どの質問でもいくつかの選択肢が用意されています。その中から、あなたが、日ごろ、思ったり考えたりしていることに近いものを、決められた数だけ（例えば、３つまでというのは３つ以内のこと）選んでその番号を□の中に記入してください。もし、選択肢の中に、あなたが思ったり考えたりしていることに近いものがなければ、その他の（　　）の中に思ったり考えたりしていることを書いてください。

それでは、質問の前におたずねします。

(1)　あなたの性別は、次のどちらですか。

1.　男　　2.　女　　□ 1

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	55.1%	44.5%	66.8%	100.0%
2	44.9	55.5	33.2	

(2)　あなたの教職の経験年数は何年ですか。

1.　５年以下　　2.　６年～１０年　　3.　１１年～２０年
4.　２１年～３０年　　5.　３１年以上　　□ 2

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	22.6%	21.8%	23.4%	%
2	20.3	25.9	14.1	
3	18.1	19.0	17.1	
4	21.7	17.5	26.3	30.3
5	17.3	15.7	19.1	69.7

(3)　あなたは、次のどれにあたりますか。

1.　校長・教頭　　2.　学級担任をしている教諭・講師
3.　学級担任をしていない教諭・講師、養護教諭　　□ 3

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	10.2%	11.3%	9.0%	100.0%
2	65.6	75.5	54.8	
3	24.2	13.2	36.1	

(4)　あなたの学校の学級数は、何学級ですか。

＜小学校＞
1.　６学級以下　　2.　７学級～１２学級
3.　１３学級～２３学級　　4.　２４学級以上

＜中学校＞
1.　６学級以下　　2.　７学級～１２学級
3.　１３学級～１８学級　　4.　１９学級以上

□ 4

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	11.2%	9.7%	13.0%	18.0%
2	25.7	26.3	25.0	34.9
3	32.7	32.9	32.4	26.6
4	30.4	31.1	29.7	20.2

学級担任の方は、担任している学級の児童生徒の生活をみて答えてください。
それ以外の方は、学校全体の児童生徒の生活をみて答えてください。

質問１　児童生徒の社会性を育てるのに、特に重要な項目はどれだと思いますか。
３つまで選んでください。

1.　基本的な生活習慣　　2.　自主性
3.　責任感　　4.　勤労意欲・根気強さ　　□ 5
5.　創意工夫・向上心　　6.　情緒の安定　　□ 6
7.　寛容・協力性　　8.　公正さ　　□ 7
9.　公共心

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	70.1%	69.6%	70.7%	78.0%
2	36.7	41.0	32.0	36.7
3	43.2	41.9	44.6	38.5
4	40.2	38.1	42.4	36.7
5	12.1	11.3	13.0	11.9
6	13.2	13.6	12.8	11.0
7	48.3	51.7	44.6	40.4
8	10.5	9.7	11.4	7.3
9	22.6	21.3	24.0	34.9

質問２　あなたは、日ごろ、あなたの学校の児童生徒をみてどう思うことが多いですか。
(1)～(13)の項目について次の□の中から１つ選んでください。

1.　いつもそう思う
2.　時々そう思う
3.　あまりそう思わない
4.　ほとんどそう思わない

(1)　ほとんどの児童生徒が、お互いに仲良く接することができる　　□ 8

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	37.4%	37.9%	36.7%	55.0%
2	45.5	49.7	40.9	36.7
3	15.4	11.3	19.8	7.3
4	1.0	0.7	1.4	

(2)　日常のあいさつができる　　□ 9

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	22.8%	23.8%	21.6%	46.8%
2	47.6	49.5	45.6	40.4
3	26.6	25.8	27.5	11.9
4	2.5	0.9	4.3	

(3)　自分と異なる意見を聞くことができる　　□ 10

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	9.9%	9.8%	10.0%	12.8%
2	53.4	56.0	50.0	64.2
3	33.3	31.1	35.8	21.1
4	2.7	2.7	2.8	0.9

(4)　自分の意見を話すことができる　　□ 11

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	6.6%	8.9%	4.1%	15.6%
2	47.0	56.2	36.9	48.6
3	40.4	32.0	49.5	33.9
4	5.1	2.5	8.1	0.9

(5)　先生にていねいな言葉を使うことができる　　□ 12

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	7.1%	9.1%	4.9%	17.4%
2	39.4	39.2	39.7	49.5
3	43.6	43.3	44.0	28.4
4	9.0	8.2	9.8	2.8

(6) 学級や学年で行われる集団活動に積極的に参加できる □ 13

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	23.8%	26.7%	20.6%	40.4%
2	56.1	58.0	54.0	45.9
3	18.2	14.5	22.2	12.8
4	1.2	0.5	2.0	

(7) 学級などで決められた役割を果たすことができる □ 14

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	13.4%	14.0%	12.8%	18.3%
2	67.1	68.5	65.6	73.4
3	17.6	16.3	19.1	7.3
4	0.8	0.4	1.4	

(8) 相手の立場がわかり、相手に協力することができる □ 15

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	6.0%	6.4%	5.5%	11.0%
2	56.9	60.3	53.2	70.6
3	33.4	30.2	36.9	17.4
4	3.0	2.7	3.3	

(9) みんなでまとまって、集団を高めようとすることができる □ 16

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	9.6%	9.7%	9.4%	20.2%
2	52.6	50.3	55.2	58.7
3	32.7	34.7	30.5	20.2
4	4.2	4.7	3.7	

(10) 先生がいなくても、会議や行事などを自分たちで計画を立て実行できる □ 17

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	5.4%	6.1%	4.7%	9.2%
2	39.2	39.2	39.3	60.6
3	43.0	44.5	41.3	26.6
4	11.6	9.7	13.8	2.8

(11) ほかの人に迷惑をかけず、集団の秩序を大切にすることができる □ 18

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	6.6%	5.7%	7.5%	13.8%
2	52.3	52.1	52.7	60.6
3	37.8	39.5	36.0	24.8
4	2.5	2.1	2.8	

(12) みんなのものを大切にすることができる □ 19

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	6.9%	6.8%	7.1%	12.8%
2	42.4	42.8	42.0	54.0
3	44.1	44.5	43.6	32.1
4	5.7	5.4	6.1	

(13) 地域社会のためにつくす活動に参加することができる □ 20

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	5.2%	4.8%	5.7%	11.0%
2	38.9	42.2	35.2	59.6
3	42.8	43.6	41.8	25.7
4	12.0	8.4	15.9	2.8

質問3　あなたは、学校教育活動の中で児童生徒の社会性を育成しようとするとき、どんな場面が適切だと思いますか。3つまで選んでください。

1. 教科指導　　2. 道徳の時間
3. 学校・学年行事　　4. 児童会活動か生徒会活動
5. 学級会活動　　6. 学級指導
7. クラブ活動や部活動（小学校はクラブ活動）　　8. 休み時間
9. 清掃・作業

□ 21　□ 22　□ 23

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	20.6%	22.5%	18.5%	18.3%
2	21.8	23.4	20.0	43.1
3	54.1	50.6	58.0	56.9
4	55.3	53.7	57.2	59.6
5	46.3	52.1	40.1	42.2
6	21.3	21.5	21.2	17.4
7	26.3	13.6	40.1	34.9
8	10.7	17.4	3.3	2.8
9	41.2	43.1	39.1	22.0

質問4　あなたの学校では、社会性を育成するために、日ごろ、学校や学年で、特に重点的に取り組んでいることがありますか。

1. ある　　2. ない

□ 24

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	66.2%	67.3%	65.0%	85.0%
2	32.8	31.8	33.8	13.8

※ 質問4で、1を選んだ方だけ答えてください。

それはどんなことについてですか。2つまで選んでください。

1. 協力性　　2. 思いやり　　3. 仲間づくり（連帯感）
4. 自主性　　5. 責任感　　6. 決まりを守る
7. あいさつ　　8. 奉仕のこころ　　9. その他（　　）

□ 25　□ 26

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	22.3%	24.7%	19.6%	20.4%
2	23.3	28.5	17.2	25.8
3	38.6	39.6	37.5	39.8
4	17.1	17.8	16.3	15.1
5	10.0	8.8	11.5	7.5
6	25.3	18.9	32.6	17.2
7	39.5	40.4	38.4	53.8
8	15.7	13.6	18.1	18.3
9	1.6	1.3	1.8	

質問5　あなたは、日ごろ、特別活動や諸行事において、社会性の育成を特に意識して指導することが多いですか。1つ選んでください。

1. いつもしている　　2. ときどきしている
3. ほとんどしていない　　4. まったくしていない

□ 27

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	28.1%	28.6%	27.5%	51.4%
2	61.0	61.2	60.7	47.7
3	9.6	8.9	10.2	
4	0.7	0.4	1.2	

質問6　あなたは、あなたの学校の児童生徒が、日ごろの特別活動や諸行事の実践活動を通して学校生活に自信や意欲を持ち、学習や生活態度に望ましい変容が見られるようになったと思いますか。1つ選んでください。

1. おおいに見られる　　2. ときどき見られる
3. ほとんど見られない　　4. まったく見られない

□ 28

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	11.2%	9.8%	12.8%	21.1%
2	79.1	80.5	77.6	76.1
3	8.6	8.8	8.4	1.8
4	0.6	0.4	0.8	

質問7　あなたは、あなたの学校で、日ごろの特別活動や諸行事の実践活動を通して、教師と児童生徒、児童生徒相互の人間関係が、これまで以上に深まってきていると思いますか。1つ選んでください。

1. とても深まっている　　2. だいたい深まっている
3. あまり深まっていない　　4. まったく深まっていない

□ 29

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	10.6%	8.8%	12.6%	14.7%
2	70.9	71.9	69.7	79.8
3	16.9	17.5	16.3	5.5
4	0.2	0.2	0.2	

質問8　あなたは、あなたの学校で、日ごろの特別活動や諸行事の実践活動を通して、児童生徒の集団としての連帯感や所属感が深まってきていると思いますか。1つ選んでください。

1. とても深まっている　　2. だいたい深まっている
3. あまり深まっていない　　4. まったく深まっていない

□ 30

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	9.6%	9.5%	9.6%	8.3%
2	67.5	65.1	70.1	81.7
3	21.6	24.0	19.1	10.1
4	0.2	0.2	0.2	

質問9　あなたは、あなたの学校で、児童生徒の社会性を育成する上で、問題になることはなんですか。3つまで選んでください。

1. なにを指導すればよいのか、ねらいがはっきりしていない　□ 31
2. どのような場面で指導したらよいのかはっきりしていない　□ 32
3. どのような方法で指導すればよいのかよくわからない　□ 33
4. 教師間の共通理解がなかなか得られない
5. 教師全員が協力して取り組むことが難しい
6. 児童生徒の社会性に対する関心が薄い
7. 児童生徒の社会性を育成しようとする気持ちが、教師自身にまだ不十分である
8. 時間的なゆとりがない
9. その他（　　）

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	31.2%	33.5%	28.7%	22.9%
2	27.9	27.9	27.9	36.7
3	39.2	40.4	37.9	42.2
4	25.0	29.0	20.6	27.5
5	23.8	23.3	24.4	24.8
6	43.2	40.8	45.8	40.4
7	26.0	25.6	26.5	41.3
8	48.3	45.4	51.5	33.0
9	2.9	1.6	4.3	4.6

質問10　あなたは、児童生徒の社会性の育成に関して、あなたの学校や先生方にどんなことを要望しますか。3つまで選んでください。

1. 学級担任が、社会性を育てる基盤となる学級会活動などの時間を、より一層有効に使ってもらいたい　□ 34
2. どんな場面で、どのようにして社会性を育てたらよいのか学校全体としての話し合いや具体的な目標・計画がほしい　□ 35　□ 36
3. 社会性を育てるための学年・学校行事などが少ないので、もっと多く計画してほしい
4. 各教科の指導の時間の中でも、児童生徒の社会性を育てることにもっと意を注いでほしい
5. 教師自らが、より一層社会性に富む指導者であってほしい
6. 社会性を育てることの重要性を再認識し、目標や計画に対して積極的に取り組んでほしい
7. 社会性を育てる基盤となる特別活動などを担当している先生に、より一層リーダーシップをとってもらいたい
8. 社会性を育てるために必要な指導の時間をもっと多くとってもらいたい
9. その他（　　）

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	44.7%	44.7%	44.6%	68.8%
2	55.7	55.8	55.6	37.6
3	9.7	6.8	13.0	2.8
4	27.5	28.4	26.5	49.5
5	38.3	38.6	37.9	56.9
6	43.4	45.6	41.1	47.7
7	15.3	12.3	18.5	16.5
8	25.6	26.7	24.4	8.3
9	1.0	0.9	1.2	

質問11　あなたは、児童生徒の社会性の育成に関して、家庭にどんなことを要望しますか。2つまで選んでください。

1. しつけなどの基本的な生活習慣をしっかり身につけさせてほしい　□ 37　□ 38
2. 子どもに社会性を身につけさせることが、教科の勉強のことと同じくらい大切であることを認識してほしい
3. 親自らが、より一層社会性に富む親であってほしい
4. 子どもの社会性は、学校よりは家庭で育つことが多いと思われるから、まず家庭でしっかり育ててほしい
5. 友だちともっと遊ばせてほしい
6. 地域や子ども会の行事などに、もっと積極的に参加させてほしい
7. 社会の実際の場面で、子どもと行動を共にすることにより、子どもの社会性を育ててほしい
8. 社会性を育てるために、学校からお願いしたことがらについて、もっと協力してほしい
9. その他（　　）

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	68.9%	64.8%	73.5%	73.4%
2	36.2	37.7	34.6	33.9
3	21.9	20.9	23.0	25.7
4	18.0	15.9	20.2	16.5
5	7.3	9.0	5.3	6.4
6	9.8	10.4	9.2	10.1
7	28.8	32.2	25.1	24.8
8	2.1	1.6	2.6	4.6
9	0.7	0.5	0.8	

質問12　あなたは、地域の行事やいろいろな活動に、児童生徒や教師が参加することについてどう思いますか。3つまで選んでください。

1. 地域での活動が中心になるので、なるべく地域の指導者の主体性に任せた方がよいと思う　□ 39
2. 地域の指導者と教師が協力しながら、活動への取り組みをもっと積極的にやってほしい　□ 40
3. 教師は学校の仕事のために、思うように参加できないと思う　□ 41
4. 教師は自らの社会性をのばすために、もっと積極的に参加した方がよい
5. 児童生徒は地域社会の一員であるから、積極的に参加させた方がよい
6. 児童生徒は学校生活で精一杯なので、地域の活動は十分にできないと思う
7. 上級生と下級生が一緒に活動できるので、児童生徒に参加させた方がよい
8. 魅力ある活動をもっと多く企画し、指導者がリーダーシップをより一層発揮できるようにしてほしい
9. その他（　　）

	全　体	小学全	中学全	校長等
1	46.2%	48.8%	43.2%	33.0%
2	34.0	32.0	36.1	58.7
3	22.5	17.0	28.5	13.8
4	17.2	15.4	19.3	43.1
5	68.3	73.9	62.1	67.9
6	9.1	2.9	15.9	7.3
7	40.5	49.6	30.6	22.9
8	39.9	36.1	44.0	37.6
9	2.4	2.1	2.8	0.9

ご協力ありがとうございました。

平成元年3月25日　印　刷
平成元年3月31日　発　行

発行所　山形県教育センター
天童市大字山元字犬倉津2515
〒994　TEL（0236）54 — 2155㈹

印刷所　小　松　印　刷　所
山形市北町二丁目7番11号
〒990　TEL（0236）84 — 2735㈹